

VIEW21臨時増刊号 Vol.2 「学びに向かう高校生をいかに育てるか」 発刊にあたり

『VIEW21』をお読みいただいている先生方には、平素から多くの面でご指導いただき、心から感謝、お礼申し上げます。1974年創刊の『進研ニュース』を前身として、『VIEW21』では21世紀を見通し、先生方の教育活動のヒント、きっかけになればとの願いから、多くの情報をお届けして参りました。

昨年7月には臨時増刊号 Vol.1として、高校と社会のつながりの視点から特集を行い、多くの先生方から、激励、ご意見をいただきました。今回の臨時増刊号 Vol.2では、社会で必要な「力」や「志」を、高校と大学の7年間でどう育てるのか、高校、大学、企業の声を基に考えます。先生方の今後の活動のヒントになれば幸いです。

昨年来、これまでの高校教育を振り返る機会に恵まれ、ここ十数年の高校教育を取り巻く環境の変化と学校の対応を中心に、ある媒体に連載を行いました。連載を通して改めて考えたことは、「学校は学び舎である」ということです。学び舎には、文字通り教師が生徒を教え育てる場としての機能に加えて、実は先輩教師が後輩教師を教え育てる場としての機能が大きくあることを再確認しました。

「無くなって分かった土曜日半ドンの価値（先生方同士、管理職と先生方、先生方と生徒達のゆったりしたコミュニケーションの時間）」「先輩から後輩に継承し、同時に、時代を読み、新たな挑戦から生まれる学校文化・学習指導体系・進路指導体系」等に気付くことができました。

そうした本来的に学校が持つ価値を大切にしながら、教育貢献につながる事業であり続けたいと考えています。

これからも、学校に寄り添い、現実に即した、将来への視点を持ったご提案と、生徒の自学の習慣化につながるご提案が出来るよう努力して参ります。

今後ともご指導をよろしく願いいたします。

ベネッセコーポレーション
教育事業本部 中学・高校・大学教育事業ドメイン長
山河健二

学びに向かう高校生を いかに育てるか

Vol.2 高校、大学、社会の連続性から考える

第1部 「課題と展望」編

- 4 Part 1 **教育関係者+企業人座談会**
地域を活性化させる人材をいかに育てるか
- 10 Part 2 **大学生+社会人インタビュー**
大学生・社会人が振り返る
「今」を築いた出会い、言葉 ―私の原点
- 16 Part 3 **教育関係者+企業人座談会**
グローバル社会へのパスポート
- 22 Column **スティーブン・R・コヴィー博士に聞く** 世界で求められる人材像と「7つの習慣®」

第2部 「事例」編

- 24 事例1 **社会へのパスポート「志」**
大学生との「カタリ場」を通し、一步踏み出す意欲を引き出す
- 28 事例2 **社会へのパスポート「志」**
大学が社会と連携し、社会を担う自信を育てる
- 32 事例3 **社会へのパスポート「力」**
自ら調べ自ら考える力を土台に、国際人となる資質を育てる
- 36 事例4 **社会へのパスポート「力」**
大学や社会で必要な思考力・表現力を育てる

40 編集後記

2010年臨時増刊号Vol.1の振り返り



学びに向かう高校生をいかに育てるか

高校と社会の つながりを考える

Vol.1へのご意見（読者の声より）

◎進路を「行き先」ではなく、「生き先」と捉え、「志」を持った歩みが続けようとする生徒の育成が、目指す進路指導であると感じた。

◎「学校でしか通じない理屈」から脱し、教師自身がより広い社会に目を向けるために役立つと感じた。

正解のない社会のなかでもがき苦しみながら交渉の方向性を見だしていくのが「仕事」ということがよく分かり、企業人の言う「社会で求められる力」の部分は大いに参考になった。

Vol.2への期待（読者の声より）

◎高校、大学、企業が連携するためには、社会における「人材育成」をキーワードにすることで、教育者と企業人との間に研究者が入ってくる要素が出てくると思う。人材育成に必要な力をどのように教育内容に落とし込んでいくのかを考えたい。

◎良き企業人、社会人を育てるために、企業や社会が若者に求めているものを積極的に発信してもらい、キャリア教育を再構築する必要があると感じています。

◎企業人座談会はやはり「大手企業」の話だと感じました。地元の中小企業の話も聞いてみたいと思います。

学びに向かう
高校生を
いかに育てるか

第1部

課題と展望 編

現代を生き抜く力を高校、大学、そして社会の連続性のなかで、どのように育んでいけばよいのだろうか。



学びに向かう高校生をいかに育てるか
**高校、大学、社会の
連続性から考える**

地域の広がり

Part 1 教育関係者+企業人座談会 P. 4

地域を活性化させる人材をいかに育てるか

- ◎今しか出来ないことに一生懸命取り組ませる
- ◎人間関係の近さを大切に作る心を持たせる
- ◎いろいろな大人と話し、気付く機会を提供する
- ◎日々の生活からグローバル化を実感させる
- ◎社会の一員であることを忘れない心構えを持たせる

Part 2 大学生+社会人インタビュー P. 10

**大学生・社会人が振り返る
「今」を築いた出会い、言葉 —— 私の原点**

- ◎部活での挫折体験が頑張る力につながる
- ◎地域活動での出会いから考え方が深まる
- ◎理科の実験が進路決定の原点となる
- ◎日常生活に潜む物理法則に衝撃を受ける

Part 3 教育関係者+企業人座談会 P. 16

グローバル社会へのパスポート

- ◎多様性を受容し、コミュニケーションできる力
- ◎若者の多様性を受け止める大人の側の度量
- ◎海外経験を通じて、自分の考えを持ち、日本を見つめ直す視点
- ◎お互いの力を認め合い、自らの意見を主張できる真の協調性
- ◎正解のない実社会で重要となる「失敗する経験」

Column スティーブン・R・コヴィー博士 世界で求められる人材像と「7つの習慣®」 P. 22

生徒の成長

中学生

高校生

大学生

社会人



Part 1

教育関係者+企業人 座談会

地域を活性化させる人材をいかに育てるか

地域の高校生が地元の大学に進学する比率は年々上昇しているが、地方経済の停滞から依然として就職は厳しい状況だ。地域で育った人材が、地域を活性化するという理想的な構図を実現するために、高校、大学・短大、そして企業は何が出来るのか。九州地区の教育関係者と企業人が語り合う。

これからの社会で求められる力

山河 皆さん、本日はよろしくお願いたします。

臨時増刊号 Vol.1 1では、「自ら学びに向かう高校生をいかに育てるか」というテーマで教育関係者と企業人との座談会を掲載し、多くの反響をいただきました。そのなかで地域特有の課題もあるという声が多かったため、今回は九州を舞台に高校、大学・短大、そして企業との関係性を考えていきたいと思います。それぞれの立場から、地域社会を活性化するため出来ることを探りましょう。ま

ずは、これからの社会で求められる力について、企業サイドからご意見を聞かせてください。

見城 地方の視点で述べると、福岡では朝の散歩などで見知らぬ人同士が挨拶をしながら人間関係の近さがあります。学校でも社会でも、そういう気持ちを持ち続けられる人づくりをしたいですね。人を大切にできる心があれば、どんな事業でも行き詰まってしまうから。

更にIT化は進みますし、海外の人材との競争もますます強まります。「機械や安い労働力で簡単に置き換わられない力」が求められるでしょう。大きく言うと、出会う人や社会に対応する力と言えらと思います。社会を生き抜こうとするたくましさも欲しいですね。



今しか出来ないことを
一生懸命やり遂げて
ほしい

目原弘一

必要です。私が駐在した上海

では、現地留学や日本の大学を経て現地採用で活躍する若者が多く見受けられました。駐在員なみの金銭的処遇は得られないものの、現地人とも対等に渡り合う、生き生きとした姿を見て、たくましさを感じ、最近の日本人の若者も捨てたものではないと思いました。最近のマスコミ

高校生・大学生に見られる課題

報道などを踏まえると目的意識の強い学生と、漫然と日々を過ごす学生との二極化が進んでいると感じます。

宗 大学でも、目的を持つ学生と持たない学生の二極化は実感します。たくましさに通じますが、夢を持ち、諦めずに挑戦する気持ちも、社会に出てから大切になると思います。自分のやりたいことを見つけて、一歩を踏み出す勇氣を持つ学生を育てたいと、常々考えています。

山河 目的意識に関して言うと、今の高校生は就職に大きな不安を抱えています。そのため、学校に対して就職に分かりやすく結び付く指導



高校生に夢と現実の両方を伝えたい

大山 明

を要求してくる。企業が求めているのは、もう少し広い意味での人間力、すなわちたくましさだと感じるので、いかがでしょうか。

目原 そうですね。社会全体が就職を過度に意識している影響なので、本人の興味や考えが横に置かれ、そのまま進んでいる気がします。

す。学生時代に積むべき経験が不足し、小さくまとまった印象を受けるのです。結果として、自分で考える力や当事者意識の低下につながっていると感じます。企業としては、何でも良いので、自信を持って「今しか出来ないこれをやり遂げました」と語れる人材を求めています。

のシステムが社会に構築されれば、そうした不安も払拭されると思うのですが。

下田 就職への不安は、学習態度にも影響し、無駄なことはしたくないという「費用対効果」の感覚にもつながっているように思います。入試に不要な教科と判断すると、早々に学ばなくなるのです。

木下 実際、就職活動に苦労する学生が多いです。入社試験の間口は広いのですが、なかなか面接にたどりつけず、何十社も受けている学生もいます。

参加者

◎高校より



久留米市立久留米商業高校
進路指導部主事

大山 明
Oyama Akira



福岡県立城南高校
進路指導部長

下田浩一
Shimoda Koichi

◎大学・短大より



福岡女子短期大学
広報課課長

木下健作
Kinoshita Kensaku



福岡女子大学
入試・広報・キャリア支援室次長

宗 康成
So Yasunari



九州工業大学
情報工学部教授

安永卓生
Yasunaga Takuo

◎企業より



株式会社西鉄プラザ
代表取締役社長

見城正浩
Kenjo Masahiro



株式会社安川電機
人事総務部
人事・キャリア開発部
キャリア開発グループ長

目原弘一
Mehara Koichi

◎ファシリテーター



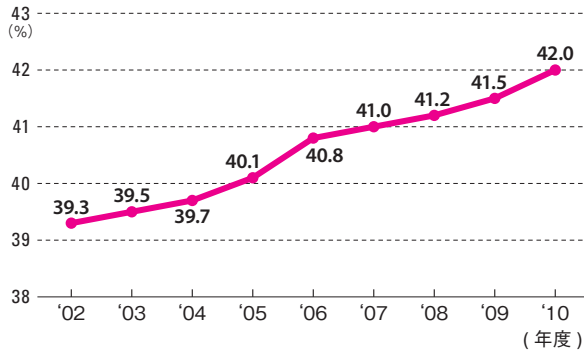
株式会社ベネッセコーポレーション
教育事業本部
中学・高校・大学教育
事業ドメイン

山河健二
Yamakawa Kenji

見城 それだけ多くの会社を受ければ、業種はバラバラですよ。 「やりたいこと」を貫くのは難しいでしょう。

宗 難しい問題ですね。本学の場合、自宅から通学可能という理由で入学し、もともと目的意識が弱い学生もいます。就職活動の時期まで、将

図1 大学入学者に占める地元高校出身者の割合



大学入学者のうち、大学所在地と同じ都道府県の高校出身者が占める割合。不況の影響、高校生の地元進学志向の影響で年々、地元進学率がアップしている

*文部科学省「学校基本調査」

「未来探し」や「自分探し」を言い過ぎたのかもしれない。理想の自分像が見つかるはずと、夢見るあまり、今の

自分を見失っている。そうではなく、この瞬間の自分を受け止め、変えていかなければならないのだと、キャリア教育で強調しています。

木下 同感です。結果や成果を意識しながら常に力の限りを尽くすこと、同時に社会の一員であることを忘れな

い心構えが重要でしょう。その結果、社会で求められる信念や情熱、感謝の心などが育つのではないのでしょうか。

見城 社会ではコミュニケーション能力も不可欠ですが、学生にコミュニケーション上の課題を感じることもあります。面接するとよく分かりますが、あまり周囲から

来についてあまり考えない学生は当然、就職活動で苦労しますが、失敗を繰り返すうちに自分と向き合い、大切なものが見えてくる。大学としては、一人ひとりを丁寧に励ましなが、何度も挑戦させます。きめ細かいサポートは、小規模大学ゆえに出来ることだと思います。

「今すべきこと」が見えない生徒も多いですね。女子生徒が「自分が何になりたい



未来を探せばかりでなく
今の自分を見つめ、
変えていくことが必要

下田浩一

制約を受けずに育っているために発想が自由な半面、周囲に対する配慮が苦手なようです。特に、自分のことは話すのに、他人の意見は聞かない学生が目立ちます。

下田 物怖じせず、自己主張する生徒は増えましたが、

例えばテストの成績が悪いと「でも私、頑張ったんですよ!」と主張をしたり、逆に、自信家の割にはちよつとしたことで自信を失ったりする。自分を守るために、現実を直視するのを恐れているようにも見えます。

「見えない力」を育むために

山河 教科学力が「見える力」ならば、社会を生き抜くための力には「見えない力」も多く含まれると、お話をうかがって感じました。こうした見えない力を、どのように育んでいるのでしょうか。

大山 大企業や有名な会社に入れば幸せなのではなく、仕事を通して人から喜ばれたり、感謝されたりすることがやがていにつながります。そのためには、学力だけではなく、コミュニケーション



常に全力を尽くし
社会の一員であることを
忘れない心構えが大切

木下健作



何を出来るようにして 社会に送り出すかを 大学は問われている

安永卓生

能力や人間力が必要でしょう。最近の若者はコミュニケーション能力に欠けると言われますが、そうは言い切れないと思います。大人が本気でぶつかれば、優れた面が表れ、期待に応えてくれることも多いからです。学校行事や部活は、そうした力を育てるのに適しています。

宗 確かに課外活動での学びは大きいですね。私は地元で城南高校出身ですが、高校でも大学でも、サッカーに没頭しました。皆で目標到達に向かって努力し、苦しさを楽しさに変えていく経験は社会でも生きています。新卒で民間企業に入社後、苦しみな

がらも前に進めたのは、目標があり、仲間がいて、皆が一体になって取り組むという、学生時代の部活とよく似た環境があったからです。

山河 学校行事や部活は「答え」がないからこそ、学びが大きいのもかもしれません。

下田 そうですね。そのような活動の中で、苦しみながら何かをやり遂げることで自分なりの答えを探し、自己肯定感や目標達成感が生まれる。高校時代、そういう体験を積んだ生徒はその後も成長し、社会に出て地域に貢献できる人間になると考えています。

安永 見えない力を育てる

ため、大学の授業も変わらなくてはなりません。今まさに、各大学がディプロマ・ポリシーをはじめ、明確なポリシーに基づいたカリキュラムの編成を進めています。「何を教えるか」だけではなく、「どう教えるか」「何を出来るようにして社会に送り出すか」を考え、狭義の学力にプラスして、見えない力を育てようとしています。

山河 具体的に進められていることはありますか。

安永 学習習慣が身に付いていない学生がいるため、自己学習力や自己評価の力を身に付けることから始めています。また今の学生は、教

員と一対一の関係は築けませんが、仲間と協同する力が欠けています。そこで最近、教

社会への希望を育む 「地域連携」

育活動にグループワークを取り入れ、協力して問題を解決する活動を導入しました。

山河 企業の方からも、「今しか出来ないことを一生懸命にやれ」と言われれば、高校生も勇気付けられそうです。どのようにして地域が生徒に夢を持たせて元気を与えるか、お考えを聞かせてください。

目原 上手く背中を押すことが大切ですね。例えば、市場の「グローバル化」は競争激化という厳しい面だけで

はありません。未知の世界で自分の活躍の場が見つかるかもしれない。だからこそ、地球規模で物事を捉える意識と、色々なことに興味を持つ純粹さを大切にさせる。そして、今しかできない何か、とことん打ち込んで納得がいくまでやり遂げさせることだと思っています。

見城 グローバル化とは、海外に出たり、外国人と接することだけではありません。自分の周りを見るだけでなく、日々の生活が外国とかかわっているという感覚を持たせることも重要でしょうね。

宗 いろいろな大人と話し、「生きていくのは、苦しいけど楽しいこともある」「こんな目的を持って生きている



いろいろな大人と話し 気付く機会を提供する ことも重要

宗 康成

人もいるんだ」などと気付く機会を提供することもポイントになると思います。生きていくこと、学ぶことに目的を持って、苦しいことに耐える力が付き、自ずと学習に向かうのではないのでしょうか。

大山 おっしゃる通りです。本校でも、現役で公認会計士に合格した卒業生に講演を頼んだり、地元企業の社長に仕事の面白さを伝えてもらったりしています。今の生徒は、周囲に憧れる存在がないことが多いようなので、企業や大学との接点を設けて、憧れを抱く契機となるよう取り組みを模索しています。

安永 今の子どもは、保護者が働く姿を身近に見ることがなく、社会を知らずに大人になります。社会に興味を持つきっかけが少ないのです。今後は、地域の大学や企業が主体的にきっかけづくりを担う必要があるでしょう。



日々の生活からグローバル化を実感させたい

見城正浩

家庭が大切です。以前、職場に社員の家族を招く機会を設けたら、子どもが父親の席に座り、山積みの書類を見て「帰宅が遅い理由と頑張る父親の大きさが初めてわかった」という話がありました。身近な大人が目標であり支援者となるよう、社員の育成に努めていこうと思います。

山河 小中高大、そして企業の連携は、地域活性化の核になると思います。既に実践されている取り組みも多いようです。

木下 本学は地域貢献活動として、希望する学生が小中学校を訪れ、漢字や計算学習の添削、パソコンの指導、花

壇づくりなどをします。その活動にしても単位には認定されませんし、活動内容は小学校の先生と話し合っただけで、もうというアバウトな制度ですが、学生は自ら進んで参加します。

安永 場を与えることで、学生は変わっていきます。我々が考える大学の果たすべき役割をひとことで表せば、「知の創造と発信」です。小中との連携によるサイエンススクール、小中高への出前授業、また図書館などの施設の開放をはじめ、大学に蓄積された知を積極的に発信することで、子どもたちが将来への展望を広げ、夢を持つても



答えがある学び 答えがない学び 双方を追いかける高校生に

山河健二

らう機会になればと考えています。

大山 出前授業などで魅力的な先生に来ていただくと、生徒の目が輝きます。「人は一生涯伸び続けるもの」と伝えると同時に、学びの素晴らしさを伝える機会を設けて意欲を引き出していきたいです。企業や大学には、夢と現実の両方を話していただきたい。「今の高校生はつまらん！」と言ってもらって構いません。そのほうが生徒も本気になりますから。

下田 将来的に地域社会に貢献する意思を持ち、地域を活性化させられる人材を育てることも高校の使命と感じています。自分のためだけに目標達成を目指すのではなく、働くことによって貢献できることの素晴らしさを教えたい。高校や大学で、そのように感じられる場をもっと与えることで、地域で貢献できる人材が育っていくのではないのでしょうか。

山河 今ベネッセコーポレーションでは、地域のお役に立てる存在になるための枠組みを模索しています。学校、家庭、地域社会、そして企業による連携が、今後の教育に不可欠であることを、ご意見をいただき改めて実感しました。本日は本当にありがとうございました。

目指すは「九州全体の文教都市化」 学校や地元企業との連携を強化したい

株式会社ベネッセコーポレーション 九州支社長 高橋正勝

働くことの素晴らしさを伝え、社会や将来への希望を持たせたうえで、厳しさもきちんと説明し「だから頑張ろう」と背中を押す。座談会では、今後の教育に求められる指導として、多くの参加者がそのような考えを述べられました。ベネッセとしても同じビジョンを共有し、教育を通じた地域活性化に取り組み、地域社会が抱えるさまざまな課題にアプローチしていきたいと考えています。



ベネッセ九州支社が目指すのは、多くの人が「九州の魅力は教育」と認識する「九州全体の文教都市化」です。その実現に向けて、今後10年間で取り組む三つの方針を打ち出しました。

一つめに、全国的に子どもたちの学びのモチベーションの低下が問題視されるなかで、自ら学びたくなる仕組みを提示し、入試でもそれ以外でも発揮できる学力の向上や生きる力の養成を図ることです。二つめは、教育を通じた地域活性化を実現し、アジア圏を中心とした海外を含む他地域から、人や企業が訪れたいくなるエリアにすることです。そして、最後に、「郷土愛」の育成です。たと

え他の地域に就職しても、地元への貢献意識を忘れない人材を育成することで、地域活性化が促されるはずで、このような方針の下で、

2010年11月、小さな一歩を踏み出しました。高校生、大学生、そして企業をつなぐ第1回「ドリ勉部！キャリアトレーニング編」の実施です。キャリア教育と教科学習をセットにした企画で、まさに冒頭で述べたこれからの教育に求められる指導と一致するような内容です。

社会は楽しいことばかりではなく、時にはいばらの道と感ずることもあるかもしれないけれど、前に進むことにワクワクする——。地方は財政的にも人口的にも厳しい現状を抱えています。それを打破していくためには、学校や地元企業との連携を深めながら、前向きな気持ちを持つ子どもを育てていくことこそ、最も大切なことではないかと考えています。

ドリ勉部！キャリアトレーニング編

高校生と企業をつなぐ 新形態のキャリア教育

「ドリ勉部！キャリアトレーニング編」は、ベネッセ九州支社が発案した新形態のキャリア教育。九州支社が面する博多駅前通りには、多くの企業がオフィスを構える。土日に通り沿いの企業に会議室を開放してもらい、高校生に業務内容に関連するキャリア教育と教科学習をセットで行う内容だ。第1回は、2010年11月7日、日本航空福岡支店との共催で実施。福岡・佐賀・長崎の高校に告知し、52人の高校生が参加した。当日は、パイロットやキャビンアテンダント、航空整備士が、業務内容ややりがい、高校時代の体験などを講義。続いて、九州支社

が作成した教材を用い、機内でのやり取りを英語で演じる学習を行った。英語学習の指導は九州大学の学生が担当。仕事内容に興味を持ち、モチベーションが高い状態で教科学習に取り組んだ。

参加者アンケートでは、満足度は5段階評価で4.8と非常に高く、「もっと英語を学びたくなった」「パイロットの仕事に興味を持った」などの感想が寄せられた。

11年度から、月1回のペースでさまざまな業界の企業と共催する予定だ。夏休みには、複数の企業で同時開催し、高校生が教室を選ぶ企画も検討中だ。「キャリア教育を通して高校生、大学生が地域の企業とつながることで、オフィス街を人材育成の拠点へと発展させていきたいです」(高橋支社長)

Case Study of In-flight Emergency Response Measures

Procedures for handling emergency cases on board (機内で病人が発生した場合の対応手順)

Cockpit Crew (機長・副機長) 運航乗務員
Cabin Attendant A (first person to find) (第一発見者) 客室乗務員A (第一発見者)
Cabin Attendant B (second person to find) (第二発見者) 客室乗務員B (第二発見者)
Cabin Attendant C (senior cabin attendant) (客室乗務員C) 客室乗務員C (主任客室乗務員)

- Cabin Attendant A (first person to find) calls Cabin Attendant B.
- Cabin Attendant B, reporting to Cabin Attendant C (senior cabin attendant), gets an oxygen bottle nearby, an AED, a blood pressure gauge box and the doctor's kit (IV, syringe etc), and hands them over to Cabin Attendant A.
- Cabin Attendant A checks the patient's respiration for 15 seconds and takes his/her pulse.

当日使用した教材(日本航空の監修の下、ベネッセが制作)の一部。「機内で病人が発生した場合」を想定して、マニュアルに基づくロールプレイを実施。リアリティのある場面設定とやりとりから、生きた英語を学んだ



日本航空社員による講義風景。キャリア教育と教科学習をセットで実施することで学習意欲が高まる

Part 2

大学生+社会人
インタビュー

大学生・社会人が振り返る 「今」を築いた出会い、言葉——私の原点

青少年期に誰と出会い、どのような経験をするかによってその後の生き方は大きく変わる。今回、編集部では大学生、20代の社会人にインタビューをし、現在の自分自身に影響を与えた、学校時代の経験を振り返ってもらった。

CASE 1 大学生Aさん(女性)

大学の意味を見いだすきっかけをくれた 高校時代の先輩の一言



◎愛知の国立大文学部美学美術史学専攻4年。高校では演劇部に所属し、大学では学内のギャラリー運営をサポート。新しいものが好きで、「興味があることには自分から積極的にかかわる」がモットー

中学の部活での挫折体験が 大学受験を頑張る力に

中学では3年間、バスケットボール部に所属していました。とても練習が厳しく、ときには倒れそうになりながらも自分なりに頑張ったと思います。しかし、思っ

たように上達せず、コーチにもあまり評価してもらえませんでした。私にとっては最初の挫折体験。負けず嫌いな私は、自分の前に出来た壁を越えられなかったのが悔しくて、「次に自分の前に壁が出来たら、必ず乗り越えてやる!」と強く思いました。

今振り返ってみると、この挫折体験が私の「頑張る力」の源になっていっていると思います。一度大学受験に失敗した

のですが、諦めずに翌年同じ大学を受験し合格したのも、「今度こそ自分の前の壁を乗り越えよう」という思いがあったからです。

受験勉強と大学の学びの つながりがイメージできない

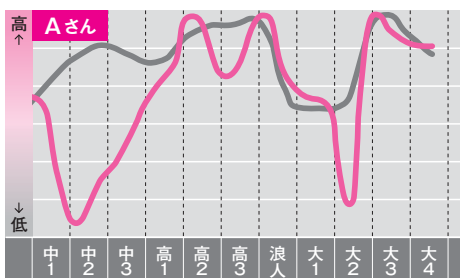
ただ、大学受験に関しては戸惑いが大きかったです。高3の1年間はどうしても受験勉強のやる気が湧きませんでした。美術に興味があり、美術史が学べる地元の国

立大を志望し、オープンキャンパスにも参加したものの、そこで見た大学生たちは、勉強よりも友人関係など、大学での生活を楽しんでいるという印象が強くなりました。

大学生の先輩などにじっくり話を聞く機会もなく、大学を目指して勉強しても、その頑張りがどう大学の学問につながるのか、大学での4年間が将来にどうつながるかも分かりませんでした。

「大学って一体何をするとこる?」と、大学の意味が見いだせないまま、1年目は結局受験に失敗しました。

浪人時代は「自分に負けた



「大学を拠点にして自分から動こう」と決心した大学2年の半ばから、「頑張る度」も「気持ちの向き度」も一気に上昇した

くない」という思いだけで勉強していましたが、大学入学

やる気曲線 インタビュー対象者に「頑張る度」と「気持ちの向き度」を今までの人生を振り返って図式化してもらった。
——が「頑張り度」
——が「気持ちの向き度」

後も「淡々と授業を受けるだけの4年間なのだろうか」と不安は募るばかり。そんなとき、中高の先輩で、高校では同じ演劇部でもあった憧れの先輩と会う機会があり、悩みを打ち明けました。東京の大学に進学したその先輩は、「もっと外に目を向けている人々と会ったり、たくさん経験をしてみては」とアドバイスをしてくれました。「そうか、受け身ではなくて、大学を拠点にして自分から動けばよいのだ。大学はそういう場所なのだ」とようやく気付きました。

それからは美術関係の学会やイベントを探して参加したり、学科を超えて興味のある研究をしている先生の下で勉強したりなど、積極的に行動範囲を広げました。

先日、就職活動の相談をするため、高2、高3のときの担任でいろいろな助言をいただいた恩師を訪ねました。「恋愛がきっかけで哲学に興

味を持ち、大学で専攻した」など、初めて個人的な経験談を話してくれました。私が大学生になり、就職活動をする時期だったので、あえて話をしてくださったのかもしれない。たくさんの人と話をすると、さまざまな価値観が鏡になり、共感できるところ

やそうでもないところがある。分のなかで明確になります。就職活動中、高校時代の恩師を含めたたくさんの人に会って話を聞きました。その度に「自分だったらどうするか」と考えることで、自分の価値観や将来像を考えやすくなりました。

CASE 2 大学生Bさん(女性)

地域活動を通じた、さまざまな人との かかわりが自分を大きく成長させた



◎東京の私立大文学部現代社会学科4年。高校では放送部、大学では学園祭実行委員、ラジオクラブに所属。卒業後はネットワーキングニアとして働く予定

地域活動での出会いが 社会に目を向ける契機に

通っていた高校は派手な生徒が多く、志望して入ったものの、周囲にあまりなじみませんでした。放送部に入り、それなりに楽しい日々を過ごしていましたが、次第に

家と学校を往復する毎日でのよいかと疑問を持ち始めました。そんなときに偶然見つけたのが、地域の中高生による区政参加委員の公募です。学校外の人たちと知り合いになれそうですし、社会のことを知り、考える機会になると思いました。高校以外に

データ1 社会人が実感している「高校時代にやっておけばよかったこと」

社会人(3,574人)のうち高校時代にやっておけばよかったことが「ある」34.6%(1,237人)と答えた人の回答から抜粋

カテゴリ	割合
1 勉強全般、特定の分野の勉強(英語以外)	20.4%
2 部活動	15.2%
3 英語の勉強、語学	9.4%
4 留学・海外旅行	9.2%
5 社会や仕事を知る、進路を知る・考える	7.0%
6 友人、対人コミュニケーション、人間関係	6.4%

◎受験に関係ない教科の勉強をもっとしておくべきだった。社会で直接は役立たないけれど、幅広い教養はあった方がいい。困難な時に自分を支えてくれるから。

◎根拠に基づいて考えを展開する論理的思考力を身に付けるために、もっと数学や化学など、理系の勉強をしておけばよかった。

◎数学や理科を勉強しておけば、現在の自分の職業、製造業に必要な技術的な知識の土台として役立ったと思う。

◎文化祭にもっと積極的に取り組み、周囲の友だちと力を合わせて

目標を達成する経験をしておくべきだった。

◎団体競技などの部活動をしておけば、社会で求められるチームワークを経験できただろうと思う。

◎何でも良いから部活動をすべきだった。力を合わせて頑張った、クラスメイトとはまた違う友だちをつくれたと思う。

◎海外留学の機会があれば、異文化社会に生きる人たちと触れ合うことで視野が広がり、大学や日本社会を多角的に捉えられたと思う。

◎職場体験学習でいろいろな職業の現場を知ることが出来たら、もう少し広い視野で自分の進む道を決められたはず。

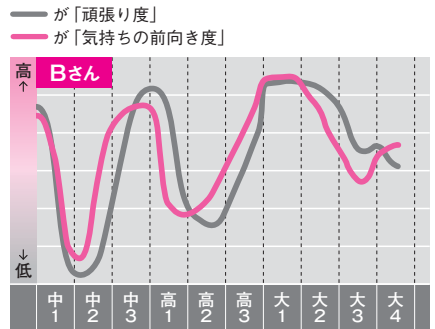
◎先生や親族以外の社会人から、どんな考えから志望大を決め、職業を選んだかを聞くことで、自分の進路選択の参考にしたかった。

◎自分の意見を論理的に述べ、文章にまとめる力を高められる機会があればよかった。社会に出てから絶対役立つと思う。

◎アルバイトなどの社会経験。高校生の自分の力を試せるし、どの程度のことが出来るのかを知る機会にもなるはずだから。

◎もっと積極的に自己主張をすべきだった。協調性はもちろん大切だけれど、いつも周囲の意見に流されてしまう自分の性格にコンプレックスがある。それを変えられたかもしれないから。

データ1からデータ4まではBenesse教育研究開発センター「社会に必要な能力と大学・高校時代の経験に関する調査」(2010年12月)より抜粋。就職活動を経験した全国の大学4年生・6年生、大学院2年生2,059サンプル。全国の人1年目~3年目、10年目~12年目(大卒または大学院卒の正規社員・職員。民間企業は従業員数300人以上で1次産業は除く)3,574サンプル



高校入学直後は張り切っていたが、次第に学校になじめなくなり、頑張り度も前向きな気持ちもダウン。高2のときに学校外の活動を始めたことから、再び意欲が高まった

も自分の居場所を見つけれ
れるかもしねないと、2年生
のときに応募しました。

委員は中学1年生から高
校3年生までの約30人。「子
どもの立場からの少子化対
策」がテーマで、5〜6人の
グループで調べ、結果を全員
でまとめて区長に提言しま
した。活動では、厚生労働省
の少子化担当の方との勉強
会もあり、社会問題に関心の
低かった私には学ぶことが
かりでした。結婚や出産など
の将来を思い描くきっかけ
になったことに加え、社会で
起きている問題を自分のこ
とと捉えて考えることが出

来るようになりました。

委員との議論は、毎回、楽
しかったです。年齢に関係な
く、賛成でも反対でも自分の
意見を出し合い、一つの社会
問題について考えていくこ
とは、高校では得られない体
験でした。委員のOB・O
G、区の職員が議論のファシ
リテーターとして参加して
いたので、中学生から大人ま
で、さまざまな人の意見を聞
き、価値観に触れられ、考え
方が広がりました。

**つらくても真面目に
継続すれば力となる**

活動を通して社会への関
心が高まり、大学は現代社会
学科に進みました。大学でも
仲間と何かを作り上げてい
く活動を続けようと、学園祭
実行委員会に入りました。約
120人が所属する大所帯
で、学園祭ウェブサイトを制作
の担当に手を挙げました。中
学生のころに、何でもすぐに
調べられる利便さからイン

ターネットに興味を持った
のですが、どんなのめり込
み、ウェブサイト制作方法を
自分で勉強するようになり
ました。自分の得意なこと
で学園祭を盛り上げることに
貢献できたと思います。

高校・大学でのさまざまな
活動もそうですが、私の良さは
何事にも真面目に取り組
むところだと思います。振り
返ると、小学生のときに通っ
ていた書道教室での経験が
大きいと思います。最初は親
の勧めで嫌々通っていたの
ですが、真面目に取り組むう
ちに、書道雑誌で特選に選ば
れるまでに上達しました。字
が上手だと褒められること
も増え、何事も続けることが
大切なのだと実感しました。

卒業後はネットワークエ
ンジニアとして働きます。第
1志望はシステムエンジニア
でしたが、残念ながら内定
は出ませんでした。志望とは
違う仕事に就くことになり
ますが、今までとは違う環境

で新たな出会いがあると思
うとわくわくします。私の長
所である真面目さを生かし
て頑張りたいと思います。

CASE 3 社会人Cさん(男性)

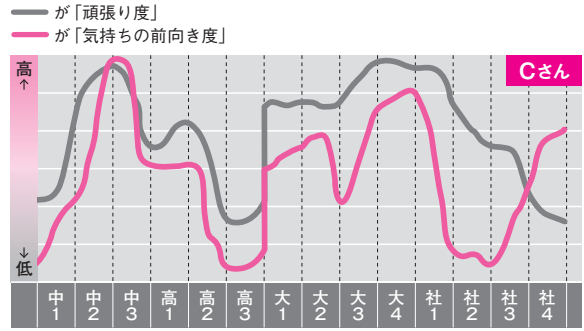
**小学校時代の実験重視の授業が
理系の道を進む原点到**

◎29歳。愛知の国立大工学部エコロジー工学
専攻出身で、大学時代は、自動車のプラスチック
製品のリサイクル方法について研究。現在は、
自動車部品関連の企業で企画・開発を担
当している

**小学校時代の理科の実験が
進路決定の原点到**

現在、自動車部品関連企業
の技術職として、企画・開発
を担当しています。振り返っ
てみると、私の原点は、小学
校6年生のときの理科の授
業にあると思います。実験が
大好きな先生がいて、通常、
小学校では行わないような
実験をしたり、「もしも原子
が見えたなら」というタイト
ルで、酸素原子の1億倍の模
型を作ったりしました。教科
書に書かれていることが、実

際に目の前で起こるのが面
白く、徐々に理科、特に化学
の世界に引き込まれていき
ました。この実験の経験があ
ったおかげで、理論を重視す
る高校の化学の授業でも、教
わる内容を具体的に思い浮
かべることが出来、理解が進
みました。
大学でも、実験でリアルな
科学現象を体感したいとい
う思いは強く、少人数で実験
重視の大学に進学しました。
「環境」を生物学や工学、
化学などさまざまな学問か
らアプローチする学部で、4



実験に没頭できた大学時代は総じて「頑張り度」が高い。特に研究室に配属された大学4年からは、2つの曲線ともに上昇

年生で研究室に配属され、自動車のプラスチック部分のリサイクルする方法について、企業と連携して研究しました。

企業との共同研究では、結果を出すことが求められます。週1回、教授と企業の方との進捗ミーティングもあり、綿密に計画を立てたうえで実験を実施しなければならず、共同研究の厳しさを経験しました。設定をいろいろ変えながら、ひたすらプラス

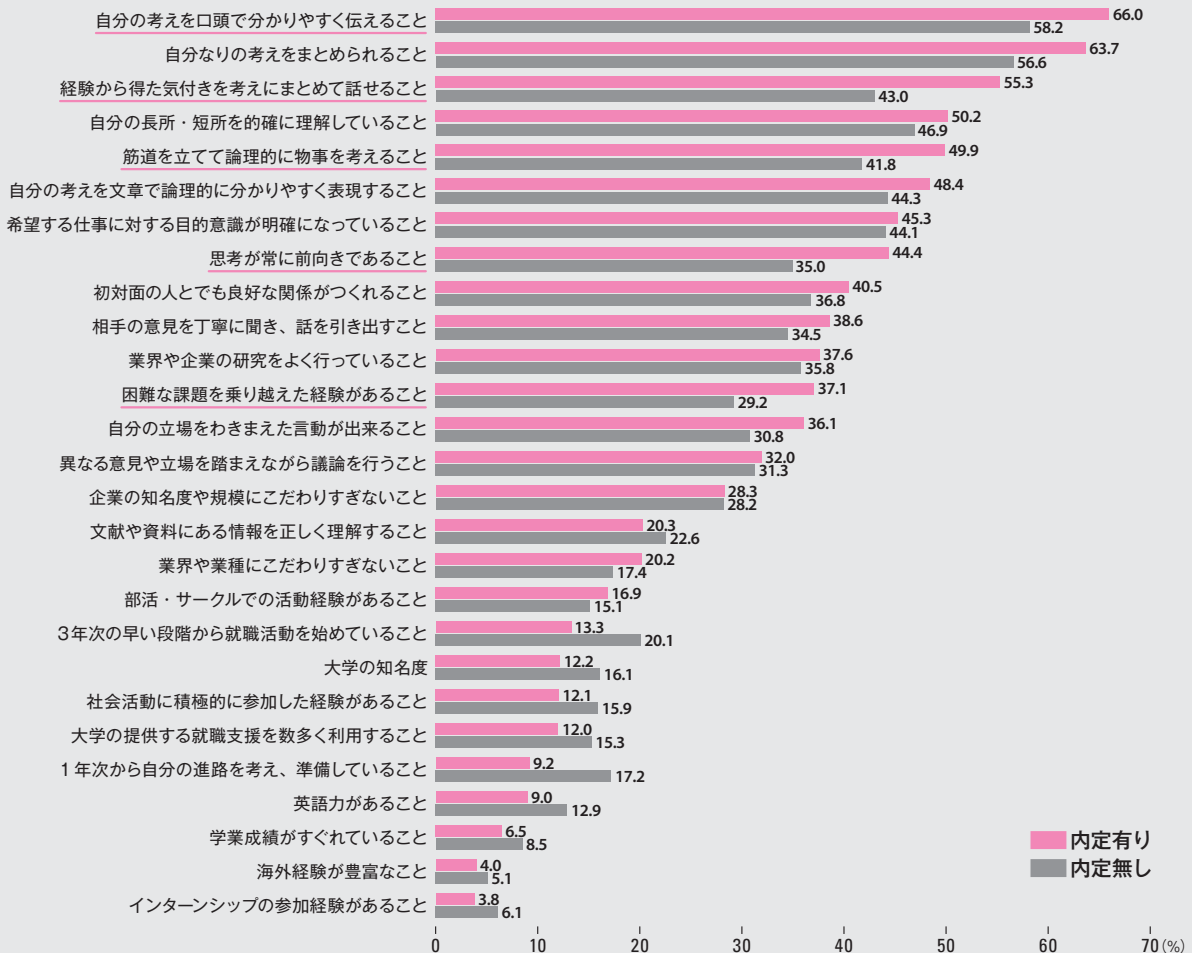
チックを燃やす地道な実験を、ときには徹夜しながら続ける毎日。担当教授からは、大まかな指針だけを与えられ、あとは自分で創意工夫しなければなりません。研究結果を出すために、いろいろな解決法を自分で考えては失敗することの繰り返しでした。

ただ、私が所属していた学部には、生物学関係をはじめとした、さまざまな学問領域の研究室が集まっていたので、研究の壁にぶつかったときには異なる学問領域の研究室に相談に行くこともありました。自分と専門領域や考え方が異なる人たちと解決策を探る過程はとても刺激的で、新たな視点をいくつも得られました。

**実験で身に付いた力が
社会人になっても役立つ**

社会人になり、これまでの経験が役に立っている場面はたくさんあります。例えば

データ2 就職活動においてどの程度重要だと感じましたか (「とても重要」の比率)



就職活動を経験した全国の大学4年生・6年生、大学院2年生 2,059 人の回答。下線 〃 の項目は、内定有りの学生と内定無しの学生の回答差が大きい上位5項目

ば、自分の前に課題が現れたとき、解決策を自分で考えて実行する力。これは、実験の過程と同じです。入社当時は自動車の設計や図面の知識がなく、会議で先輩の話に全くついていけませんでした。

仕事では、専門以外のことで学ばなければならぬことがたくさんあると痛感し、「技術士」の資格を取得するという目標を立て、入社前に1時間集中して勉強。製図などの知識を身に付け合格することが出来ました。

仕事をしながら新しいことを学び続けるのは大変でしたが、私は、逆境下でも考え方を変えたり工夫したりして、そこに面白さを見つけています。これは、小学校時代のソフトボールクラブでキャプテンをした経験が大きく生きています。休みの日は朝5時から日暮れまで厳しい練習が続くクラブで、理不尽なことともたくさんありました。そんなつらいなかでも、

仲間と励まし合い、みんな楽しんで工夫をしました。今考えると、この経験も課題解決力につながっているのかもしれないですね。

また、企画・開発という仕事では、いろいろな人と意見を出し合い、一つのアイデアに肉付けしながら、ものを作る力、コミュニケーション力や会話力、伝える力が不可欠です。これは大学時代、課題を解決するためにいろいろな人と意見を出し合った経験が役に立っています。人の意見を否定するのではなく、受け入れ、更に膨らませてより良いものを作っていくという姿勢は本当に大切だと思います。更に、相手が言ったことを的確に理解する力も必要です。相手が言いたいことは何かを考えることで相手のことを思う力が付き、それが、新しいアイデアを生みます。

私がこれらの力を付けることが出来たのは、先ほどお

話しした大学の研究室での創意工夫と失敗の繰り返し

の経験が大きく影響しているとあります。

CASE 4 社会人Dさん(女性)

物理の授業で学ぶ興味が高まり 自ら机に向かうようになった



◎25歳。父親からパソコンをもらったのをきっかけにコンピュータに興味を持ち、福岡の私立大情報工学部情報通信工学科に進学。現在はシステムエンジニアとしてコンピュータ・ソフトの開発・保守を行っている

日常生活に潜む 物理法則に衝撃を受ける

小学校、中学校と、私は勉強が好きではありませんでした。先生や両親に叱られたくないので勉強はしていましたが、正直に言っていて、楽しいとは思えなかったのです。変わったのは、高2で物理を学んでからです。私の高校では物理は選択科目でした。最初の授業は運動エネルギーについての説明で、先生は電車や自転車がなぜ動くのか、そこにどんな力が働いて

いるのかを解説しました。普段よく使う移動手段が、自分が知らない物理法則によって動いており、乗っている自分もその法則の影響を受けていることが分かり、日常生活を見る目が変わるような衝撃を受け、物理に対する興味が一気に高まりました。授業では毎回、センター試験などの過去問題が宿題に出され、その解法は次の授業で生徒が発表します。物理を選んだ生徒は少なく、全員が指名されるため、宿題をしないわけにはいきません。しか

も発表中は、「その公式を使った理由は？」「そこに働いている法則は？」と先生から質問が飛ぶのです。先生は、返答が曖昧であれば叱りましたが、正確に答えられれば「よく頑張ったな」と、褒めてくださいました。

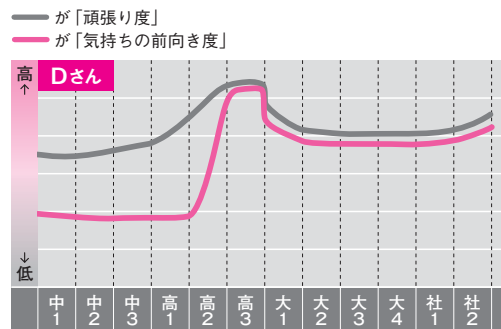
私は完璧に答えられるように準備して授業に臨むようになりまし。教科書や参考書の記述で納得できなければ、図書館で調べました。先生に努力を認めてほしかったし、何よりも物理の知識を深めたかったのです。そうした気持ちは、物理の授業を受けていた生徒は皆持っていたと思います。実際、私たちは休み時間や放課後に集まって解き方を相談し、調べ物でも協力し合いました。

学ぼうという意欲は 他教科の勉強にもつながる

問題を解くのが楽しくなった物理は、成績がどんどん上がり、「もつと難しい問題

を解いてみたい」という意欲も生まれました。それに比べて、数学の勉強にも身が入るようになったのです。

その頃、私のクラスでは担任の先生の方針で、定期テストの各教科と総合得点それぞれの成績上位者10名を表にして貼り出していました。私は、物理と数学は順位表に名前が載るのですが、総合得点の順位はさほど良くありませんでした。最初は「好きな勉強だけすればよい」と考えていたものの、次第に「他教科だって勉強すれば、きつ



物理の授業と出会った高2で、「気持ちの前向き度」が急上昇。「親に叱られたくなくて勉強する」状態から、「勉強が楽しい」「友だちと力を合わせて調べる」というように勉強への姿勢が大きく変わった

と出来るようになる」と思うようになったのです。

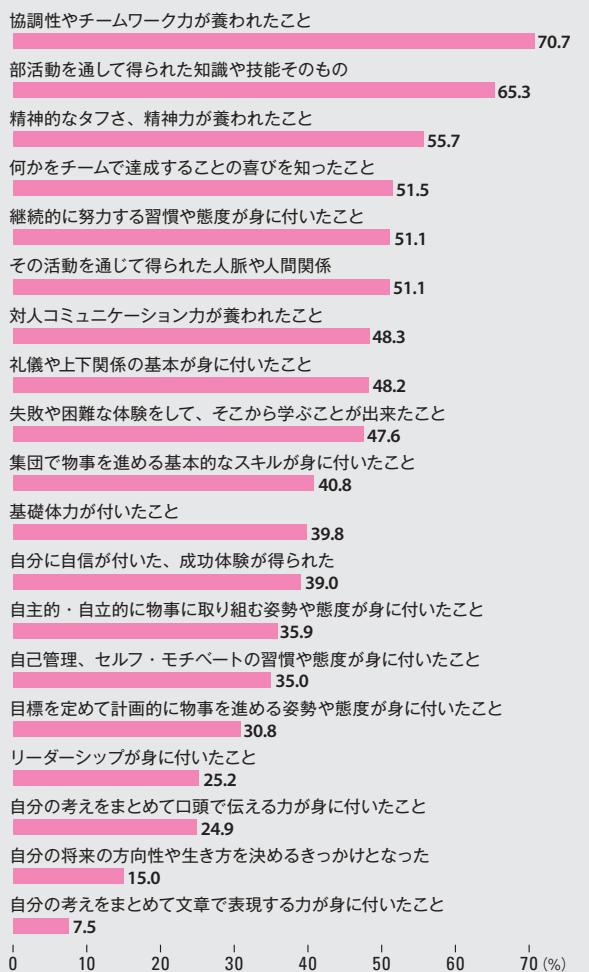
根気よく予習・復習を続けるうちに、総合得点でも10位以内に入れるようになりました。友だちと一緒に考えたり、先生に質問したりすることで、歯が立たなかった問題が解けるようになる。この喜びは、どの教科にも共通することになり、気が付いたのです。

今振り返ってみると、高校の体験は今の仕事の進め方に生きていると感じます。私の仕事はシステムエンジニアです。この仕事にはチームワークが必要です。クライアントの求めに応じて、チームの一人ひとりが互いに進捗状況を報告し合って業務を進めます。時間や分量の面で厳しい依頼もありますが、そうした依頼のほうはむしろモチベーションが高まります。一つの目標に向かって皆で協力することで自分がいかに成長するかを、高校時代に実感できましたから。

と出来るようになる」と思うようになったのです。

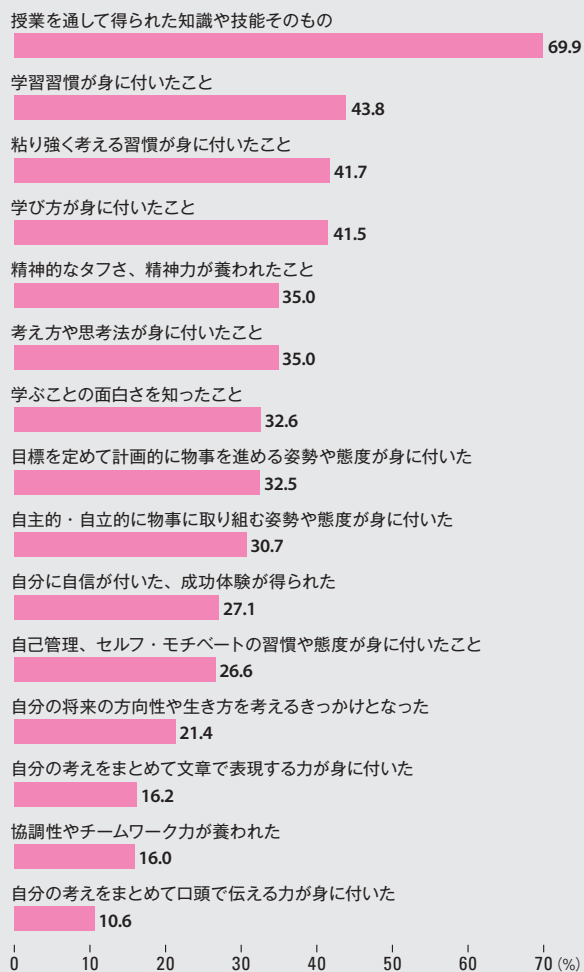
根気よく予習・復習を続けるうちに、総合得点でも10位以内に入れるようになりました。友だちと一緒に考えた

データ4 高校時代の「部活動」を通して得られたこと



部活動に最後まで所属していた人で「とても力を入れた」「まあ力を入れた」と回答した大学生、大学院生 1,085 人の回答

データ3 高校時代の「授業」を通して得られたこと



授業に「とても力を入れた」「まあ力を入れた」と回答した大学生、大学院生 1,321 人の回答



Part 3

教育関係者+企業人
座談会

グローバル社会へのパスポート

今や企業は業種を問わず、海外市場を視野に入れ、国際的な競争力を備える人材の育成が急務となっている。グローバル化が進む社会を日本の若者が生きていくうえで、どのような力や心構えが必要になるのか。今、求められている教育について、高校教師と大学人、企業人が意見を交わした。

グローバル化が進むなかでの 企業の実態

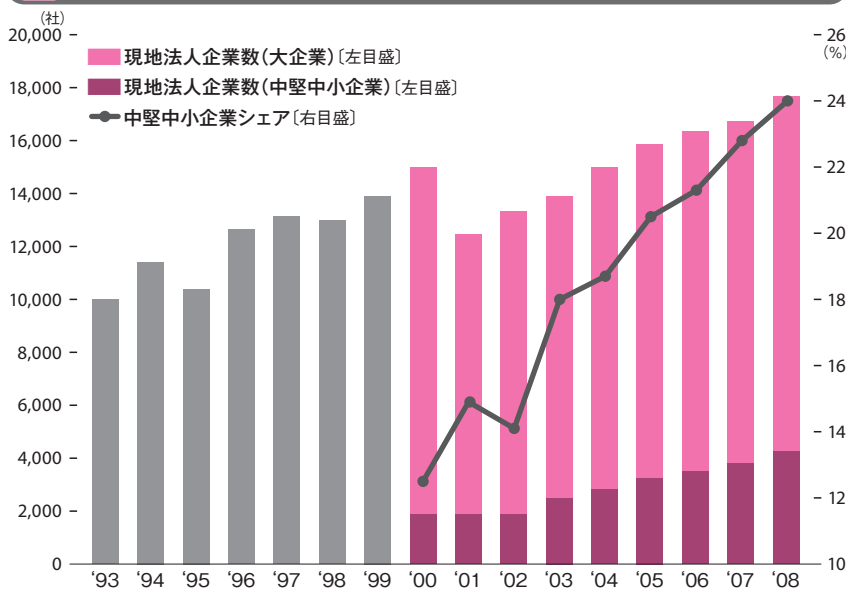
**文化や価値観などの
多様性の受容が不可欠**

福竹 本日はよろしくお願
いいたします。グローバル化
の進展により、今の高校生は
これまでとはかなり違った
社会を生きていくことにな
ると思います。その一つの表
れとして、国内外での雇用面
の競争はますます広がるで
しょう。そこで最初に、企業
が体感されているグローバ
ル化の実態についてお話を
いただきながら、求められて

いる人材像を探っていくた
いと思います。

深澤 今年で創業139年
を迎える資生堂の歴史のな
かでも、グローバル化による
近年の変化は劇的です。海外
での販売自体は半世紀以上
の歴史がありますが、10年ほ
ど前から海外事業が加速し
て、今では84か国に進出し、
売上の約4割は海外です。
社内の雰囲気も変わりがま
した。私が入社した30年前
は、英語が話せる社員はほん
のひと握りでしたが、5年ほ

DATA 本社規模別にみた現地法人企業数の推移



かつて、海外進出を行う企業と言えば大企業であったが、近年は中堅中小企業においても海外展開が拡大している

(注) 大企業は本社資本金10億円超、中堅中小企業は本社資本金10億円以下。99年以前は規模別データなし
(出典) 経済産業省「海外事業活動基本調査」を元に三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

参加者

◎高校より



京都市立堀川高校
校長
荒瀬克己
Arase Katsumi



東京私学教育研究所
所長
鴨友学園女子中学・高校
常任理事
清水哲雄
Shimizu Tetsuo



岩手県立大船渡高校
校長
鈴木晃彦
Suzuki Teruhiko

◎大学より



上智大経済学部教授
職業指導委員会委員長
荒木 勉
Araki Tsutomu



立教大経営学部教授
経営学部長
山口和範
Yamaguchi Kazunori

◎企業より



ベルリッツ コーポレーション
取締役
バイスプレジデント
田辺純一
Tanabe Junichi



株式会社資生堂
人事部人材開発室長
深澤晶久
Fukazawa Akihisa

◎ファシリテーター



株式会社
ベネッセコーポレーション
高校事業部
福竹康志
Fukutake Yasushi

ど前に国際事業のトップが外国人になり、海外の事業部門では会議や文書は英語でやり取りされています。また、海外事業の比率の高まりに合わせて、ここ数年採用活動にTOEICのスコアや海外留学・在住経験などにも注目するようになりました。現時点では日本人が主体ですが、毎年、外国人も採用しています。

田辺 ベルリッツは70を超える国や地域に550以上の拠点を設け、語学教育を中心とした事業を展開しています。企業活動のグローバル化が加速した時期は、はっきりとは分かりませんが、一つ

のきつかけとなったのが、05年、アメリカで『The World Is Flat』（邦題『フラット化する世界』）が出版された前後ではないでしょうか。日本では、この1年で企業の英語公用語化が大きく報道され、社員への英語研修に力を入れる傾向が強まっています。企業における英語の必要性はかなり前から言われてきたことではあります。

グロバライズした社会では、あくまでも言葉は道具であり、コミュニケーションを成り立たせる力が不可欠です。そのためにはまず、文化や価値観などの多様性を受容する必要があります、自分の考

えが相手に理解されるように伝えたり、交渉したりする訓練も欠かせません。ベルリッツでは語学教育を超えてこのような分野でのトレーニングも提供しています。

企業と教育現場が考える課題の所在

グローバル化に対応できる人材を育ててきたのか

福竹 次に、グローバル化に対応する人材育成の現状や課題を考えていきましょう。

田辺さんのお話のなかにあった「多様性の受容」が、キーマンの一つになります。

山口 私が学部長を務める立教大の経営学部でも、ダイ

つありますから、日本企業が参入する必要性も高まっています。

バーシテイ・マネジメント（*）を非常に大事にしており、高校時代に多様な体験をした学生を受け入れると共に、アジアだけではなく、欧

米からの留学生も受け入れています。経営に関する知識を深めるだけなら同質性の高い学生を集めるのが効率的ですが、リーダーシップや

異質な経験を持つ学生が協力して目標を達成したりする力は、やはり多様性のある集団で育ちます。

清水 同感ですね。多様性を認めずして、これからの教育は成立しません。1996年にユネスコが出した「21世紀教育国際委員会報告書」の中

に、今後の教育では「知る（to know）」「行う（to do）」「共

知（to share）」の3つがキーワードとされています。

* ダイバーシティ・マネジメント…企業経営などにおいて、多様性（ダイバーシティ）を重視する考え方。性別や人種、国籍など、さまざまな面で多様性のある組織をつくり、個々人の特性を生かすことで、多様な価値観に対応する商品開発などを旨とする。



人は育てた通りに育つ。
試行錯誤しつつも
考えようとする生徒に

荒瀬克己

に生きる (to live together)」「人間として生きる (to be)」の四つを学ぶことが重要という記述があります。多様性を考えるうえで、特に「共に生きる」が大切でしょう。これは、迎合するのではなく、「will (意志)」と「respect (尊重)」を持って人々が接し合うことが前提となります。学校教育のなかでこうした力を育てれば、グローバル化に対応できる人間性のコアが形成されるのではないのでしょうか。

うとは言えないように思います。ある一部上場企業の経営者が、新入社員全員に挫折経験の有無を聞くと、「ある」という答えが3%だったそうです。また、保護者の多くが安全・安心・簡単・便利を求める傾向とも重ねると、一概には言えませんが、これだけのだろうかと心配になります。守られ続け、挫折をせずに過ごしてきた新卒の学生を一括採用する方式が適切かという点にも疑問があります。人材育成は、大人の側の責任ですから。

深澤 当社においては現在の7割ほどで既卒の応募も



仕事は
「出来るか出来ないかではなく
やるかやらないか」である

深澤晶久

可能です。そのようにして、出来るだけ多様性を受け止める人材を採用したいという気持ちはありますが、一方で新入社員を育てるミドルマネジメント側に受け入れる準備が出来ていないことが課題です。その意味で「共に育つ」必要性を感じており、06年に「資生堂『共育』宣言」という人材育成方針を打ち出し、仕事を通して社員全員が共に成長していく人づくりを目指しています。

田辺 おっしゃる通り、多様性を受け入れられる中堅リーダーの育成には難しさを感じます。企業がグローバル化した社会を生き抜くには多様な個性を持った社員が必要ですが、尖った個性を持つ若手に対する許容度が意外と低い。下から突き上げられ、上から業績のプレッシャーを求められるという厳しい状況は理解しているのですが、それにしても、「こいつは少し変わっているな」という若手をどっしりと受け止める度量は企業として大事です。

清水 教育現場で関連する話をしますと、生徒は「未来からの留学生」と考えれば、過去の技術しか持たない教師がどれだけのことを教えられるのかという、少し控えめな気持ちを持つべきかも知れません。だからこそ、従来のような詰め込みではなく、「学び方を教える」ことをより重視する方向へのシフトが大切だと考えます。

例えば数学なら、解法を記憶させるのではなく、思考力の向上を意識した指導を心掛けることで、自ら考えて学んでいく力が付くでしょう。他の教科でも「学び方」を教えられる場面を整理して、全体的なカリキュラムとしてまとめたかと考えています。

鈴木 生徒には「生きる力」よりも「生き抜く力」を身に付けなさいと伝えたい。明るく生き抜く力を育成する原点は、教師一人ひとりが自分という人間を通して学びの感動を生徒に浴びせ、「私の哲学はここだよ」と教えることではないでしょうか。さまざまな価値観が存在することを生徒が知り、内面化することが、「生き抜く力」につながっていくと思います。

荒木 私の所属する上智大

は、もともとグローバル人材の育成を目指してきましたが、企業が学生に求めることを踏まえ、学内にもグローバル化や多様化に対応する環境をもっとつくる必要があるとも感じています。内定を受けた後、「企業の期待が大き過ぎる」と焦ってしまう学生が少なくないのです。

山口 高度な語学力を求める企業も増えてきました。語学を身に付けることがゴールではなく、本来の自分の力を発揮するために必要な力の一つとして、指導に力を入れたいと思います。

「内向き」で「同質化」の傾向

福竹 グローバル化というと、どうしても外向きの意識になります。その点はどうお考えでしょうか。

荒木 インターネットの普及などにより、実際に海外に行こうとする学生が減っていることに気付きました。そ

こで97年頃から、ヨーロッパを中心に異文化を感じられる国々に、企業訪問という形で学生を連れて行くようにしています。実際の海外経験を通して、相手との価値観の違いを踏まえ、自分の考えを持つようになっていきます。そうすることで、日本の良さを見つめ直すことにもつながると考えています。

鈴木 私は「Think Globally, Act Locally」という言葉をよく使いますが、これは足元の日本を見つめ直すという考え方に通じます。すべての生徒が海外に出て活躍するわけではありません。むしろ、グローバルな視点で学ん

だことが地域の活性化につながるように考えていく必要もあるでしょう。そのためには、グローバル化を前面に出した指導は必要かもしれませんが、どこまでが不易で、どこまでが流行かを見定めることも不可欠です。

深澤 当社には海外勤務を希望して入社する社員が大半ですが、国際事業のトップですら、まずは日本国内の仕事で求められる力をしっかりと身に付けるべきと話しています。スピード感のある社会だからといって、知識やスキル習得を急ぐのではなく、むしろ時間をかけて人間性をじっくりと育てる視



Think Globally,
Act Locally

鈴木晃彦

点での人材育成を大切にしています。

荒木 そのお考えに共感しますが、今の学生は気持ちの面も内向きという課題もあります。語学面ではさほど心配ないのですが、外国人と対等に議論するのが苦手です。海外の大学はディスカッションが多いですが、日本では目立つことを避けようとして発言が出ないのでインタラクティブな授業はなかなか成立しません。もともと知恵や元気のある学生が多いですから、きっかけさえつくれば積極的で優秀な人材になると思います。

深澤 採用時のグループデ



海外経験を通じて
自分の考えを持ち、日本を見つめ直す視点の大切さ

荒木 勉

イスカッションでも、とてもよく似た印象を受けます。ディスカッションは盛り上がりませんが、最後、1人に結論をまとめてもらおうとする、途端に手が挙がらなくなる。何とか誰かに発言してもらおうと、とても素晴らしいためで、それなら最初から発言すればよいのに……と、いつも思います。入社した社員に理由を聞くと、「協調性が大事と思って」と言われて驚きました。

荒瀬 アメリカの小学校の教室に「Have your opinion」という掲示があると聞きますが、日本では「みんな仲良く」。それが悪いとは思いません

が、お互いの違いを認め合っ
て力にすることこそがチー
ムワークであり協調です。日

本では、皆が同質化すること
で安心するようなどころが
あるのではないのでしょうか。

積極的に「外」に目を向ける 生徒を育てるために

失敗する経験を 大切に

荒瀬 人は、育てた通りに育
つものです。分からないこと
に出合っ、自分でじっくり
と考えて取り組まずに、すぐ
に「正解」を欲しがるのは、
そのように育ててきたから
です。教師が安易に答えを教
えない、生徒が自分で、ある
いは生徒同士で協力して、試
行錯誤しながらも答えを求
めようとする姿勢を育てる
ような授業への転換が必要
です。大学入試もそのような
方向で改善していただきたい
と思います。学生確保を主
眼としたAO入試や推薦入
試ではなく、人材育成を意識

した入試です。そういう高大
連携が望まれます。

清水 そうですね。文部科学
省が新学習指導要領で定義
した学力は、「学んだ力」「学
ぶ力」「学ぼうとする力」と
いう三つの力で表されます。
自分の意見を構築して、相手
に伝わるように発信するこ
ういう意味では、「編集力」と
言ってよいかもしれません。
こうした力がAO入試で問
われれば、「なぜ大学に行く
のか」という点から指導でき
るようになります。

山口 大学入試が高校教育
に与える影響の大きさは自
覚しています。我々としても
受験機会の均等は必要だと
思いますが、結果の均等にな



「will」と
「respect」を持って、
「共に生きる」ことが大切

清水哲雄

ってはならないという気持
ちがあり、多様な体験を持つ
学生に来てもらうための工
夫をしています。

荒木 受験生が多いため、な
かなか一人ひとりの個性を
見る余裕はありませんが、多
様な人材を受け入れる制度
は必要と考え、本学も公募制
推薦入試を重視しています。
高校時代のさまざまな経験
を通して、自分に自信のある
学生を出来るだけ受け入れ
る方針です。

福竹 生徒がすぐに答えを
求めるといふ問題提起があ
りましたが、企業での状況は
いかがでしょうか。

深澤 新人研修では、仕事に

は正解も間違いもないこと、
そして「出来るか出来ないか
ではなく、やるかやらないか
」が大切であることを強調
して伝えてきました。また、
受け身の姿勢からの転換を
ねらいに、3年程前にインプ
ットからアウトプットを重
視した研修に変更しました。
アウトプットをするために

は十分な理解が必要ですが
ら、質問が活発になるなど研
修に臨む姿勢が変わり、若手
に積極性が芽生えつつある
と感じています。

田辺 深澤さんの言われる
通り、ビジネスは答えがない
ことに挑戦する世界です。重
要なのは、徹底的に議論を尽
くして、やると決めたらやる
こと。失敗したら別のことを
考えればよいのです。

山口 学生時代に失敗する
経験の大切さは教育現場で
も意識しています。社会に出
て初めて失敗するのでは大
変なことになる可能性があ
りますから。

清水 そうですね。私の高校



多様性を受容し、
コミュニケーションを
成り立たせる力が重要

田辺純一



失敗の経験から 多様性受容への 耐性を付けさせたい

山口和範

でも、いろいろな場面で、あえて失敗させています。例えば、高校1年生の理科の授業で、それまでの知識や経験を生かして、十種類の液体の種類を突き止めさせるペア学習を取り入れています。生徒は失敗ばかりですが、だからこそ創意工夫が生まれ、成功したときは達成感から満面の笑みで喜びます。

荒瀬 堀川の総合的な学習の時間も、課題探究型の学習です。基礎知識を学んだ後、生徒が自分でテーマを決め、仮説を立てて検証し、論文にまとめるのですが、その直前に全員がポスター形式の発表をします。完成した研究の

発表ではなく、その一歩手前の発表です。聴衆の教員や大学院生や保護者などから質問や指摘を受け、研究の精度を高めることが狙いです。

また、「やりとり」がありますから、一方的なプレゼンではなく、コミュニケーション能力を伸ばすことにもなります。こうして体験的に学ぶことは、学力とともに学習意欲の向上にもつながります。自分で考え、人とのやりとりを通して学ぶことは、生徒の可能性を掘り起こします。

鈴木 我々も生徒会や学校行事など多くの場面で、生徒に任せるスタンスを重視しています。失敗を含めて前に

進んだ経験を持たせて社会に送り出したいという気持ちがあります。そのような教育を通し、たくましく生きるための根っこをつくり、どんな社会にでも対応できる、いわば「雑食系」の生徒を育てたいと考えています。

『グローバル化』 地方の生徒にとっての

田辺 私見ですが、都市部に比べ、地方の学生の方がグローバル化に挑戦していく可能性が高いのではないのでしょうか。都市部のような既に形が出来上がった世界にいるとその状態を維持するのにエネルギーを使います。そ

の点、地方であるがゆえにグローバル化への抵抗のなさがあるかもしれません。

鈴木 本校の生徒の大半は、卒業後、親元を離れます。確かに、自立を迫られることによるたくましさはあるでしょう。グローバル化を考えるとき、地方にも良い人材がたくさんいますし、その人材を生かすために地方の学校こそ、もつとグローバルな人材育成を意識した挑戦的で刺激的な取り組みをしてみたい、というのが個人的な想いです。

学校の教育方針がぶれていては、グローバル化した社会を生き抜いていく生徒を

育てるのは難しい。まずは教師がグローバル化に対応する教育の在り方をしっかりと考え、チームとして指導を蓄積し、生徒はもちろん、保護者の意識改革も促していくことが重要でしょう。

山口 自宅から通う大学生は、現状に満足して環境を変えたがらない、言い換えればリスクテークをしたがらない傾向はあるかもしれませんが、挫折したけれど、自分で立ち上がって何とかやれた。そんな経験を通して環境が変わること、そして多様性を受け入れることへの耐性を身につけることが、グローバル化した社会を生きていくうえで必要だと思えます。

福竹 皆さんのご意見から、グローバル化という状況に適應することだけを考えるよりも、「グローバル化しても大丈夫」という人材を、人間性の土台から育てることの大切さを感じました。本日はありがとうございました。



「グローバル化しても 大丈夫」という人材を

福竹康志

世界で求められる人材像と「7つの習慣®」 スティーブン・R・コヴィー博士に聞く

「人格」を重視する 「7つの習慣®」

私はアメリカで出版された成功に関する書籍を研究しました。その結果、昔は謙虚、誠実、勇気といった人格に関するものを重視していました。最近の五十年ではスキルやテクニックなど表面的なものが重視されるようになっていくことが分かりました。

しかし、私は人格という土台があつてはじめてスキルやテクニックが生きてくると考えています。また、たかさんの保護者、教師、経営者と話をしたところ、社会は



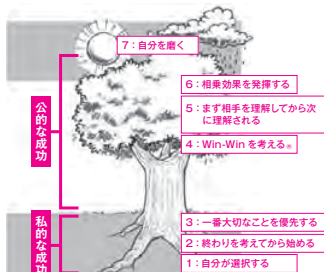
スティーブン・R・コヴィー

◎20世紀に最も影響を与えたビジネス書の1つとされる『7つの習慣 成功には原則があつた!』の著者。リーダーシップの権威として国際的な評価を得ており、フランクリン・コヴィー社の共同創設者・副会長、教師、作家、組織のコンサルタントとして現在でも世界中で活躍しています。



『7つの習慣』(キングベアー出版)はスティーブン・R・コヴィー博士が過去の成功者の実例を基に著した書籍です。世界で2000万部、日本でも140万部を超えるベストセラーとなっています。社会人向けの研修や教育現場、政府機関でも導入され、広く活用されています。

7つの習慣® イメージ図



◎『7つの習慣』では、人間的な成長を「成長の連続体®」と捉え、他人に依存している状態から相互依存へ成長していくまでの過程を7つの習慣としてまとめられています。第1の習慣から第3の習慣までは「私的な成功」と呼ばれており、自分自身が成功するために必要な習慣、つまり、基礎となる根っことして表されています。第4の習慣から第6の習慣までは「公的な成功」と呼ばれており、周囲の人たちと成功するために必要な習慣であるため、外の世界と触れる木の幹として表されています。最後の第7の習慣は、それぞれの習慣の効果を高めて、よりパワーアップするためのものなので、太陽や雨で表されています。

*上記の各習慣は、大人向け『7つの習慣』を10代の生徒向けに分かりやすく言い換えた表現で紹介しています

これからの世界で 求められる人材像

グローバル化が急速に進んでいき、国籍や考え方の異なる人たちが仕事をする機会が増えるに従って、「相互依存」の必要性がますます高まっていくでしょう

もっと強い人格の持ち主を求めていることが分かりました。「7つの習慣®」は「依存」「自立」「相互依存」という3つの成長のレベルを通して、周りの人とのかわりのなかで、より大きな結果を出すための土台「人格」を育てるものとしてまとめました。

う。今までは人格のなかでも「自立していること」が強調されてきましたが、今後は更にその先にある「相互依存」できるレベルに達しなければなりません。具体的には、チームビルディング、協力的な問題解決、相乗効果ということを考えて行動できる人材が求められてくると思います。

相乗効果とは、「私の案」「あなたの案」と異なる考え方があなかで、双方を満たすことの出来るより良い案「第三案」を追求することです。生徒一人ひとりを見ていますと、他の人がいないと力を発揮できないというわけではあ

りませんが、他の人と協力することによってより大きな結果を生み出すことが出来る、そういう考えをきちんと育てることが大事だと考えます。(私)でもなく、(あなた)でもなく、(私たち)という単位で物事を考えられる想像力と創造性が、グローバル社会で求められる人材の重要な素養になるでしょう。

「自立」の鍵は自分の 価値を理解すること

とはいえ、「相互依存」のレベルに達するためには、まず「自立」していなければなりません。自

分のなかに誠実さや一貫性をきちんと持ち、自分はどんな人間なのかという確信を持つ必要があると思います。つまり、アイデンティティーを持つことにつながります。残念なことに、今の社会では、自分ではなく、第三者からの見られ方によってアイデンティティーが決め付けられがちです。ですから、生徒一人ひとりの価値、潜在能力を理解させてあげることがとても重要です。先生方には、ただ伝えるだけではなく、生徒が自信を持てるような状態までサポートしてあげてほしいと思います。

学びに向かう 高校生を いかに育てるか

第2部

事例編

高校・大学・社会が連携して
社会に必要な「志」や「力」を
育てるためのヒントを4つの事例から探る

社会へのパスポート
「力」

社会へのパスポート
「志」

高校

事例3 P. 32

自ら調べ
自ら考える力を
土台に、
国際人となる
資質を育てる

渋谷教育学園幕張中学・高校

事例1 P. 24

大学生との
「カタリ場」を通し、
一歩踏み出す
意欲を引き出す

東京都立桜町高校
NPO法人カタリバ

大学

事例4 P. 36

大学や社会で
必要な
思考力・表現力を
育てる

課題解決力育成のための教材
『大学生基礎力BOOK
シリーズ』

事例2 P. 28

大学が
社会と連携し、
社会を担う
自信を育てる

京都産業大
「コーオプ教育」
早稲田大
「ボランティア体験」

社会

「学び」に向かう
高校生を育てる

事例1
社会へのパスポート
「志」

毎年2万人の高校生と交流
成長への「きっかけ」を提供

高校時代は将来と向き合う大切な時期だが、保護者や教師以外の大人とかかわる機会は意外と少ない。外の世界の大人とのちよつとした出会いから、将来を具体的にイメージしたり、目の前に広がる可能性に気付いたり、一步を踏み出す「きっかけ」が生まれるのではないかと――。

そんな思いがNPO法人カタリバの出発点となっている。2001年、当時大学生だった代表理事の今村久美氏と共同創設者の竹野優花氏の2人は、大学生を中心としたボランティアスタッフが高校を訪問して

大学生との「カタリ場」を通し、 一步踏み出す意欲を引き出す

大学生のボランティアスタッフが高校を訪れ、生徒と本音で語り合うプログラム「カタリ場」を実践を通し、外の世界にいる「先輩」との出会いから、生徒が自分と向き合い、将来へのイメージを膨らませていく姿を追う。

生徒と語り合う授業プログラム「カタリ場」の活動を始めた。生徒の意識改革に及ぼす効果が注目されたほか、07年度からの3年間、東京都教育庁地域教育支援部の教育支援コーディネーター事業において業務委託契約をしたことで高校での実施が増え、現在は首都圏を中心に年間約80校、2万人の高校生とかかわりを持つ。

「キャスト」と呼ばれる登録スタッフは大学生を中心に専門学校生や社会人など約4千人。プログラムごとにキャストがプロジェクトチームを構成して高校を訪問する。キャストは、最初に事務局で基本的な研修を受けた後は、プログラムを通じた実務経験でスキルを高めていく。

カタリバでは、キャストと高校生とのかわりを「ナナメの関係」と呼ぶ。教師と生徒のように「タテ」ではなく、友人同士のように「ヨコ」でもない。学校外の先輩との「ナナメ」だからこそ、本音を語り、本当の自分と向き合うきっかけになると考えている。

高校生とキャストは年齢が近く、価値観も重なるところが多いため、「数年先の自分」をイメージしやすいうえにお手本にもなりやすい。「自分もこうなりたい」という「憧れ」の気持ちが生まれれば、生徒の成長を促す大きなきっかけとなる。生徒から共感を得られるように、キャストもありのままの自分を表現するよう心掛けている。

「カタリバ」という授業

—社会起業家と学生が生み出す“つながりづくり”の場としくみ—

著者◎上阪 徹 発行◎英治出版
話し手◎今村久美、竹野優花、
NPO法人カタリバ



カタリバの立ち上げから、「カタリ場」の活動を通して社会の課題と向き合い、解決していくとする様子が紹介されている。

特定非営利活動法人 NPO カタリバ

◎2006年にNPO法人格を取得。高校生や大学生に向けた独自のキャリア教育プログラム「カタリ場」などを運営。大学生を中心に延べ約4,000人のスタッフを擁する。09年、内閣府「女性のチャレンジ賞」受賞。

住所 〒166-0003
東京都杉並区高円寺南 3-66-3
高円寺 commons 203

電話 03-5327-5667

Webサイト <http://www.katariba.net/>



チェックの場面。身近な話題や関心事などからキャストが「高校生の今」を掘り起こす。高校生にとっては自分を見つめ直す機会となる

高校の実態に合わせて プログラムをつくり込む

カタリ場を通して、キャストと高校生の間にはどのような関係が生まれるのか。10年12月、東京都立桜町高校の2年生約230人を対象に実施したカタリ場の様子を紹介する。

カタリ場の成否を大きく左右するのが、教師へのヒアリングや生徒へのアンケートを通じた事前の実態把握だ。プログラムは共通ではなく、実施学年や時期、生徒の様子や課題、

教師が生徒に期待する変化などを基に高校ごとにつくり込む。

同校は、約65%の生徒が現役で大学・短大に進学する男女共学の普通科高校。進路指導部主任の鳥居純子

先生は、「本校の生徒は、自分はこの程度なのだとはじめから諦めているところがあり、頑張っって伸びていこうとする意欲に乏しい」と話す。

カタリ場は毎年2学年で実施し、今年度で4回目。大学進学や受験勉強を身近に感じさせることで、生徒の気持ちの向かう方向を変えたいという思いから、進路学習の一環として実施している「卒業生による進路トーク」などに加え、カタリバのプログラムを組み込んだ。キャストとの語り合いを通して生徒の心にス

イッチが入り、「自分もやれば出来る」という前向きな気持ちにつながれば、というのが教師たちの願いだ。

こうした実態を踏まえ、カタリバが提案した今年度のテーマは、一人ひとりが「自分の強み」を考えること。等身大の自分を見つめ直し、自分の良さを受け入れることが前向きな姿勢につながると考えた。

当日は、約60人のキャストが事前

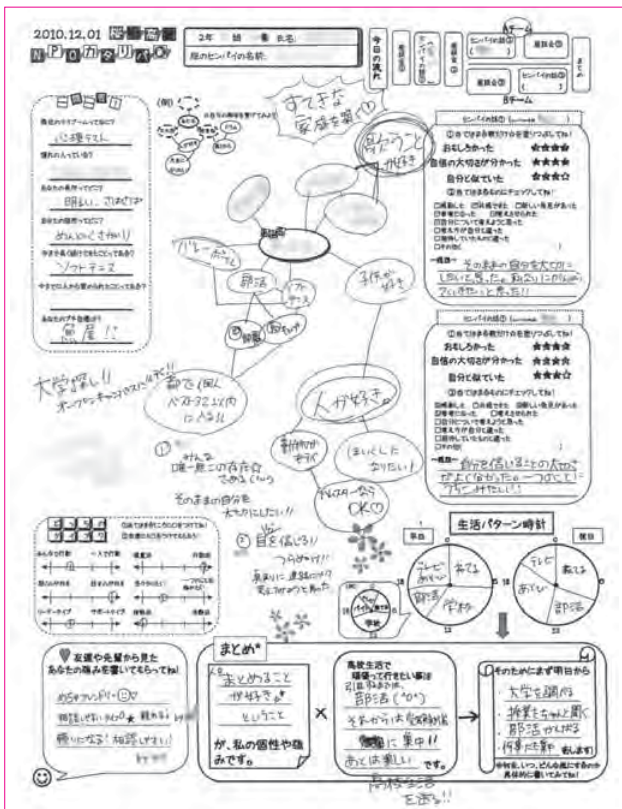
に集まり「シミュレーション」と呼ばれる練習会を実施。生徒の実態、プログラムの狙いや進行などを共有し、キャスト役・生徒役に分かれてシミュレーションを行った。

約2時間のプログラムは、大きく分けて、「チェックキング(座談会)」「サンプリング(先輩の話を聞く)」「約束」の流れで進行する。入場時から生徒の心に寄り添う演出は始まっており、会場の体育館には高校生に人気の音楽がかけられている。キャストは体育館に散らばり、入ってくる

生徒に「こんにちは!」「どこのクラス?」などと話し掛け、そのまま会話につなげながら、あつという間にキャスト1人に対し4〜6人の生徒のグループをつくり上げていく。

プロジェクトリーダーが全体に流れを説明した後、チェックキング(上写真)が始まった。グループごとに床に座り、キャストが自己紹介をした後、好きな音楽や趣味、部活など身近な話題から一人ひとりの興味・関心を探っていく時間だ。並行して、生徒は「ワークシート」(図1)の

図1 自分を探る「ワークシート」



ワークシートは企画ごとに内容が異なる。アイデアマップで自分の興味を広げたり、性格や生活パターンを分析しながら、グループで対話をする

質問に沿って、自分の興味の広がりや、長所・短所、憧れの人、今まで長く続けてきたこと、人から褒められたことなど、「自分の強み」を探る手掛かりを記入していく。その間、キャストは意識的に身を乗り出したリ、寝そべったりしてリラックスした雰囲気を出し、生徒から話を引き出した。

失敗を隠さず伝える先輩の話から自分を見つめ直す

続くサンプリング(下写真)では、7人のキャストが高校時代の悩みや関心事、現在の目標や大切にしている価値観などを15分ほどスピーチ。生徒は一旦グループを離れ、興味のあがるキャストを1人選んで話を聞く。「自分に自信がなく、2度も引きこもりを経験したが、人間関係を大切にすることを心掛けたら前向きな性格になった」

「何をするのもダルくて高校も辞めてしまったが、農業を営む年配の方の話を聞いて、目の前のことに真剣に取り組むようになった」

過去の失敗や悩みをストレートに

伝えるキャストの体験談に真剣な表情で聞き入る生徒が少なくない。スピーチはスケッチブックを使った紙芝居形式で、面白おかしく話すキャストも多く、生徒たちは話に引き込まれ、会場のあちこちで笑い声が出る。

続いて2回目のチェックキングとサンプリングに入る。1回目と異なるのは、グループを二つに分け交代でチェックキングとサンプリングを行う点だ。人数を減らすことで生徒が本音で語りやすくなる、別のキャストの経験談も参考にして、考えるためのサンプルを増やす、といった狙いがある。

グループはキャスト1人に対し生徒2、3人となり、より親密な雰囲気になった。この頃には生徒もずいぶんリラックスし、「自分が何をしたいのかが分からない」「欠点ばかりで自分に自信がない」など、ポツリポツリと本音を漏らすようになる。それに対しキャストは、答えを示さない。「その欠点が逆に良さとして表れる部分はない？」など、あくまでも考えるきっかけを与えることに徹する。



「スイッチ」を入れるために「ナナメ」の力を借りる

東京都立桜町高校 進路指導部主任
鳥居純子先生

何事にも「ほどほどが良い」と考えていて、とことん努力して自分を引き上げようとはしていない生徒の意識を変えたいと考えていた頃にカタリバの活動を知りました。一方的に話を聞かせるのではなく、双方向で語り合う形式に興味深く感じたのが導入の決め手でした。

プログラムは、とても緻密につくられていると思います。生徒の実態を詳しく調べて内容を考え抜いているため、生徒の心に訴えかけるものがあります。初回は、生徒が斜に構えて冷めた態度をとるのではないかと心配でしたが、皆が楽しそうに積極的に話す姿を見て、「教師には出来ない関係の持ち方」を実感しました。以来、プログラムの間は教師はあまり口を出さず、キャストの方々に任せられています。

誰もが高校時代に「やりたいこと」を見つけられるとは限りません。しかし、私はそれでよいと思っています。目の前のことを頑張り続けることで、自分の道が見えてくることもあるものです。一生懸命になった経験のある人が一生懸命になることの大切さを教える、そんなカタリバのプログラムを通し、生徒には目の前のことを精一杯頑張ることの大切さに気付いてほしいと思っています。

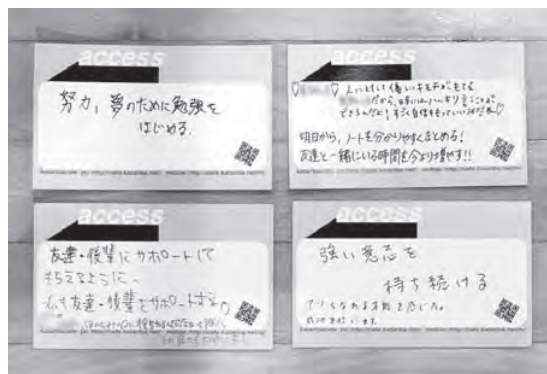
プログラムを終えると、多くの生徒がまるで魔法にでもかかったかのように前向きな姿勢を見せます。もちろん、そのモチベーションをずっと維持するわけではありませんが、1年後のアンケートでも肯定的な回答を寄せる生徒が大半ですから、やはり大きなプラスになっているのでしょう。今後もカタリバの活動には期待しています。

プログラムの進行中、教師は外側から生徒を見守った。2学年担任の岡村ひろみ先生は、「普段は無口な生徒が積極的に話す様子を見て、驚くと同時にホッとしました。多様な進学先や考え方を見せられるという点では、卒業生の講演とは違った良さがあると思います」と語る。生徒が普段は見せない一面を見せた——。カタリバスタッフによれば、これは先生が最もよく口にされる感想の一つという。



サンプリングの場面。自分の体験や大学で打ち込んでいることなどを語り掛ける。高校生は、自分自身を考えるきっかけになる

プログラムは、「約束」によって締めくくられる。一人ひとりに渡された「約束カード」(右写真)に、生徒が約束を記入して今後の決意を示し、キャストが背中を一押しするような励ましのコメントを添える。プログラムを終了後も、なかなか会場を去らず、キャストに話し掛ける生徒が多かった。数人の生徒は、キャストが事後ミーティングを行う教室の外まで来て、しばらく話し続けたほどだ。更に話したいことがある生徒は、この後もウェブ上の掲示板でキャストと交流できる仕組みを用意している。



約束カード。グループで話したことや先輩の話聞いて感じたことを振り返り、約束カードに行動目標として書き込む

約9割の生徒が「プログラムに満足」と回答

生徒はどのような感想を抱いたのか。直後に実施したアンケートでは「プログラムに満足」という回答が89%に達した。フリーアンサーでは、「考えが広がり、目標を決められた」「自分に自信を持つことは大切だと思った」「これからの進路が楽しみになった。早く大学生になりたい」「いろいろな人の気持ち分かるようになる、という『約束』をした」などの声が寄せられ、進路、人生観、人間関係など、さまざまな面で良い影響を受けていることが分かる。

同校では、今年、カタリ場の実施から1年後にもアンケートを行ってみた。それによれば、現3年生の生徒の88%が、プログラムに対してプログラムの印象を持っていると答えている。「はつきりと決まっていなかった進路を決められた」「いろいろな人の話が聞けて、自分はどうすべきかを考えられた」「大学生活が具体的にイメージできた」など、生徒たちの印象はさまざまだが、自分を見

つめ直し、将来を考えるきっかけになっているようだ。

一方、ボランティアであるキャストにとっても、何が活動のモチベーションになっているのだろうか。誰に聞いても返ってくる答えは、「生徒の変化を見られること」だった。あるキャストは言う。

「女子生徒から『受験勉強をしたけれど、周りの友だちはしていないので迷っている』と相談されたんです。『自分の気持ちを大切にしてい

頑張ったら、翌年、カタリバの掲示板で志望大に受かったと報告がありました。自分と話したことが良い結果につながったことが本当にうれしく、やりがいを感じました」

価値観の多様化が進むなか、生徒に志を高く抱かせるためには、「カタリ場」のように教師や保護者とは異なる「大人」との交流の場をつくることも、一つの解決策になるのではないだろうか。

先生方との強い連携があっはじめて成功する

NPO法人カタリバ 共同創設者
竹野優花氏



私は大学時代に、多くの人との出会いによって自分の世界がどんどん広がっていく経験をしました。そんな出会いが高校時代にあれば、もっと早くから自分自身や社会、将来について深く考えられたかもしれない。そのような気持ちでカタリバを立ち上げました。

カタリバのキャストには、コミュニケーションが得意な人も苦手な人もいます。いわば「普通」の人の集まりです。そんなキャストが、なぜ初対面の生徒の心を開けるのか。生徒の感想に多いのが、「先輩が自分に対して必死に向き合おうとしてくれたのがうれしかった」といった言葉。必ずしも高いコミュニケーション能力が必要なわけではなく、キャストの本気がかかわろうとする意思が伝わったときに生徒は心を開いてくれるのです。

カタリ場のプログラムは2時間ですが、高校生活は3年間です。その場限りではなく、いかに高校生活全体に影響を及ぼせるプログラムに出来るかという視点を大切にしています。そのためには、先生方との強い連携が欠かせません。

カタリバを始めてから、生徒の将来に対する先生方の強い思いを実感しています。ある進学校から、受験を終えた3年生を対象とする依頼がありました。「進学先は決まったが、社会で強く生きていくためのハングリーさを身に付けさせて大学に送り出したい」という先生の言葉に感動しました。これからも先生方との連携を強め、プログラムの質を高めて、高校生に「きっかけ」をつくり続けていきます。

事例2 社会へのパスポート 「志」

大学が社会と連携し、 社会を担う自信を育てる

内定率の低下、就業力育成など大学と社会の接続部分には課題が山積している。このようななかで、大学教育と実社会での体験を連携させることで、大学での学びの価値を高め、社会で活躍できる人材を育成する取り組み事例を紹介する。

ケース1 京都産業大「コーオプ教育」

自己実現のエネルギーを 大学と社会の学びの融合で培う

京都産業大で「コーオプ教育」(下コラム参照)が行われるようになってからは、近年の学生に共通する気質の変化があった。それは自己実現に向かって歩き出す力が不足し、目的や問題意識を持って講義に臨んでいないというものだ。

「そこで、従来から行われてきた、



京都産業大
キャリア教育研究開発センター
運営委員長 経営学部教授
後藤文彦
Goto Fumihiko

学生にとって効果の高いインターンシップを、4年間の大学での学びと強固に結び付けたいと考えました」とキャリア教育研究開発センター運営委員長の後藤文彦教授は説明する。「短ければわずか数日で終わってしまうインターンシップでも、学生は我々が驚くほど多くの気付きを得て、大学に帰ってきます。大学(オン)と社会(オフ)の学びを融合させるために、毎年必ず実社会で学ぶプログラムを策定しました」

インターンシップで最大の効果を得るため、コミュニケーション力の育成、現場で得た気付きを大学での学習に生かす方法、更に社会で必要なスキルを育むためにコーチングやファシリテーションを活用するなど、学内の教学体制も充実させた。「1年生では自分自身について考えるレポートの作成や、先輩学生へのインタビューなどを通して『なりたいもの』に気付く。2年生ではその実現のために『やるべきこと』を知り、そして3年生までの実社会での体験を通して自分が『出来ること』を知るのです」(後藤教授)

大学での学びを自分に必要なものとして受け止める、いわば自己実現のエネルギーを培うプログラムだ。

京都産業大のコーオプ教育

◎京都産業大のコーオプ教育 (Cooperative Education) は、大学が主導で管理運営する就業体験プログラム。教職員の連携の下、学内での学習と就業体験を交互に繰り返す「O/OCF (オン/オフ・キャンパス・フュージョン)」を展開する。更に、学んだ知識を活用しながら、企業から与えられた課題を学年・学部を横断したチームで解決するPBL (Project-Based Learning) プログラムに進化させ、大学の学びと実社会での学びの融合を強化している。PBLプログラムを取り入れた現在のO/OCF-PBLは25人1クラスの少人数制で実施。学生は実社会での体験を通して、職業観を育むとともに現場で求められる能力を知り、大学での学問の重要性を再認識していく。 Webサイト <http://www.kyoto-su.ac.jp/path/career/ce/>

体験した大学生が振り返る

実社会に触れることで 主体性と広い視野を得ました

京都産業大経営学部3年 仙田満利さん

「現場を学んでほしい」と
企業から率直な声も

O/OCF-PPBL (P28)のコラム参照)に初めて参加したのは2年生の4月です。私が参加したのは医療機器メーカーの「人にやさしい診療空間 今までにない新型歯科診療台の構想」というプログラムでした。週1回の授業とは別に、週2日ほど自主的に集まり、30年後の構想を議論しました。

途中、企業の担当の方に中間報告

をするのですが、そこで自分たちの考えと企業が求めているものに大きなギャップがあることが分かりました。担当の方からは「現在の事業に役立つ提案をしてほしい」「現場に来て学んでみてはどうか」といった指摘をいただきました。

それを契機に、工場見学に出かけたり、歯科診療のニーズ調査を行いました。徹夜で資料をまとめることもありました。途中で抜けたりしませんが、グループの仲間や企業の方に迷惑がかかりますから。

グループでやり抜くことの
大切さも学ぶ

3年生では、旅行会社の「京都環境ツアーの企画立案」に取り組みました。実際に自分たちの企画が商品



旅行会社の担当者とは頻りに打ち合わせを行った。企画立案に向けては、広く意見を聞くために消費者にヒアリングも実施。「こんな値段なら自分は行かない」と言われたことも。消費者の本音を知ること出来た

化されると知り、こんな機会はめったにないと意気込みました。

前回の取り組みで企業の方とのコミュニケーションの大切さを実感していましたから、今回は自分たちから積極的にコンタクトをとるようになりました。ほぼ毎週、担当の方と会って話し合いました。

苦労したのは、作業が遅れたり、休んでしまった下級生へのフォローです。自分でやってしまったほうが早いと思うこともありましたが、全員で取り組むのがこのプログラムの趣旨なので、最後までグループ全員

でやり抜こうと思っていました。

企画が完成するまでには募集に関する制約などいろいろな壁にぶつかりましたし、商品化されたあとも最少催行人数に達するまでに本当に苦労しました。でも、大学生でありながら社会人のような体験をしたことで、いろいろな視点で物事を捉え、能動的に行動していけるようになったと実感しています。ゼミなどで先生の話や聞くときも、実社会で働く社会人だったらどう考えるのかと、視点を変えながら聞けるようになってきました。



仙田さんのグループは「地産地消」をテーマにした旅行を企画。旅行会社の担当者も「自分もこれかかないと思う」と共感してくれたという

社会問題と直面することで 潜在能力を引き出す

早稲田大の「WAVOC」（下コラム参照）では、ボランティアに関するさまざまな科目と、国内外30を超えるプロジェクトを、学部・学年を問わず学生に提供している。学生が社会に貢献しながら、体験的に学ぶ場がつけられた背景を、WAVOC元所長の堀口健治教授は「自立して学ぶ契機として、社会との接点を提供した」と説明する。

「例えば、地方で農作業に従事するのは、多くの学生にとって初めての楽しい体験でしょう。しかし、現地の人々と触れ合うなかで、過疎化・高齢化・耕作地放棄など地方が抱える問題が見えてくる。その気が付きが大学に戻ってから学んでいくモチベーションにつながります」



早稲田大前副総長
WAVOC元所長
政治経済学術院教授
堀口健治
Horiguchi Kenji

近年、学生と接する教員から「理論を教えても、それが学生のなかで自分のものとなりにくい」という声があがっていたという。多様な生活体験が乏しい現代の若者は、理論を実社会と結び付け、イメージすることが容易ではない。保護者や教師、友人以外のさまざまな人々と接して、学生自身の世界を広げる機会を大学として提供することが必要になってきたのだ。

「現場に泊まり込み、農作業などをして気付いたことを学生が発表するのですが、現地の人からすれば甘い考えも多い。感謝されることだけではなく、叱られることもたくさんあります。学生にとっては、その体験が今後考えていくための土台となります」（堀口教授）

体験が乏しい現代の若者を、そのまま社会に送り出すことは出来ない。大学が社会について真剣に考える場を提供できれば、学生はモチベーションを高め、潜在能力を発揮する、と堀口教授。社会に出るための足腰を鍛える取り組みと言えるだろう。

WAVOCボランティア支援者

菅沼弘夫さん

学生たちが力を発揮する
きっかけになりたい



千葉県で小学生を対象とした「里山わんぱく塾」を主宰しています。豊かな自然環境の里山で遊びながら、たくましく生きる力を育み、

情操豊かな子どもを育てることが目的です。WAVOCの学生たちには、里山の草刈りや遊具づくりなどをやってもらっています。初めて手にする農作業器具に戸惑いながらも、根気強く働く学生の姿には驚かされました。また、学生同士で話し合っ、子どもたちが自然の大切さについて考える紙芝居やゲームなども提案してくれます。学生たちは、みんな高い能力を持っています。あとは、その力を自分の意思で発揮する糸口が必要なのではないでしょうか。里山で経験したことが、いつか学生たちの成長のきっかけになることを信じています。

「世界をちょっとでもよくしたい

～早大生たちのボランティア物語～

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター著 / 早稲田大学出版部発行



◎ストリートチルドレン、DV、ハンセン病などの国内外の問題と向き合い、ボランティア活動に取り組む学生たちの姿を紹介。

WAVOCとは

◎正式名称は「早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター」。教育、研究という大きな使命に加え、これからの大学は社会貢献にも積極的に取り組むべきという考えから2002年に発足した。ボランティア活動の情報提供や仲介を行う従来型の機関と異なり、ボランティア関連の科目を設置し、大学としてさまざまな分野におけるボランティアプロジェクトへの学生の参加を促す。基本的な学びのサイクルは、まずボランティア関連の講義科目で現場を理解するために学術的に学び、体験的学習科目で実際に国内外の現場を訪れ、現実を理解する。そして環境や農業、教育、人権といったテーマで国内外で展開されるボランティアプロジェクトに取り組む。その後、学生同士、あるいは教員を交えた振り返りの場を経て、体験を自分のなかで価値付けし、社会と自分の関係を考えていく。いずれの場面でも、教員や現場体験の豊富な専門職員が支援していく。 Webサイト <http://www.waseda.jp/wavoc/>

体験した社会人が振り返る

さまざまな人々と広くつながり続け、 自分の世界を変えていく力を得ました

JR北海道勤務 早稲田大社会科学部卒 **大藤将太**さん

真剣に向き合ってくれる 農家の方々との出会い

大学に入学したときの私には、4年間でこれに取り組もうという確固たる目標はまだありませんでした。大学生活に期待も抱けないまま、アパートの一室で講義要項を眺めていたとき、「農山村体験実習」という文字が目飛び込んできた瞬間が、私とWAVOCとの出会いでした。北海道から上京した直後で、祖母が作るおいしい野菜を懐かしく思い出



していたからかもしれません。

WAVOCの説明会に参加して、その活動が学外のいろいろな人とのつながりで行われていることを知りました。仲間内だけで盛り上がるサークル活動などは全く違う。同じ大学生なのに、こんなに外向きのエネルギーを持った人たちがいるということに感動しました。

一歩踏み出す力を WAVOCで身に付けた

1年生の4月から国内の農業プロジェクトに参加しました。山形県の農山村で農業体験をし、農家の方々と話をしたのですが、「1回くらい来ただけでは日本の農業の実態は分からない」と言われたのです。学生に真剣に向き合ってくださいる農家の方々に接して、用意された体験をこなすだけではなく、自分が出るこ

とが何かを考え始めました。

11月からは千葉県の「里山わんぱく塾」にも参加しました。主宰の菅沼さんは、どうすれば子どもたちが楽しみ、学ぶ力を身に付けていくかを常に考えている方でした。私たちも、先輩から引き継いだ活動を繰り返すだけで終わらないように、こんな活動をしてはどうかと話し合い、提案しました。

1年生のときはWAVOCの活動で、学外のいろいろな世界を見て、そして2年生からは、先輩や学外の人たちとどうつながり、WAVOCの活動をより良くしていくかという



「里山わんぱく塾」での子どもたちとの自己紹介の様子(右)

故郷・札幌でも農業生産者との交流会に参加。その様子は新聞にも取り上げられた(下)



朝日新聞 2010年10月3日刊

ことに意識が向いていきました。

卒業直前までWAVOCの活動に参加したことで多くのものを得ましたが、その一つが一歩を踏み出す力です。世界は自分の活動で変えられます。そして、活動を楽しみ、そのなかで考え、気付いたことを発信し、また動く。楽しいだけで終わらせず、得たものを次にどう生かすのが大切だということを学びました。

就職活動は「地域の活性化に貢献できる仕事」を目標にして活動しました。今、北海道に戻り、不動産開発の部署で働いています。農家の方々と環境教育に取り組むNPOなど、地域で頑張る人々と広く連携しながら、地域の魅力を生かす取り組みをしていきたいと思っています。

事例3 社会へのパスポート 「力」

自ら調べ自ら考える力を土台に、 国際人となる資質を育てる

ケース 千葉県・私立 渋谷教育学園幕張中学・高校

「自ら調べ、自ら考える力」をベースに、国際人としての資質の養成を目指す渋谷教育学園幕張中学・高校の教育実践から、グローバル化や価値観の多様化が進む社会でも力強く生き抜いていく人材の育成について考える。

教育理念

「自調自考」の力を伸ばす
国際人としての資質を養う

渋谷教育学園幕張高校の開校は1983年と、歴史は決して古くないが、今や千葉県屈指の進学校として旧帝大をはじめとする難関大学に多くの生徒が輩出する。その教育活動を象徴する理念が「『自調自考』の力を伸ばす」だ。86年の附属中学校の開校以来、中高一貫教育を通して、「自ら調べ、自ら考える」という自主性を育み、自分の力で豊かな人生をつくり上げていく生徒の育成を目指す。進路部長の山崎弘一先生は、次のように説明する。

「『自調自考』の力が十分に備わっていれば、どのような状況でも自分の生き方を見つけられます。自分の進路を考えて実現に向けて努力するのも、生き方を見つけることに他ならないと考えます」

国際人としての資質を養うことも教育目標の一つだ。外国語を操り、海外との交流を持つ以前に、自分や日本のことを理解して自信を持って主張できる、そして異なる考えを持つ相手の話に耳を傾け、協力して物事を進められる。そのような人材が同校の考える国際人だ。

こうした教育方針は、開校時、「21世紀の社会で活躍する人材を育てる」という視点から策定された。グローバル化や価値観の多様化が急

速に進む中で、卒業生が海外の大学を含めた多様な進路を選択し社会に羽ばたく姿を見て、同校の教師は教育実践に手応えを感じている。

教育実践1

教師が考える観点を与え
生徒に自力で考えさせる

全校の教育目標は、学年ごとに具体的な方針に落とし込まれる。現在の高校2年生は、入学当初、学年主任の井上一紀先生が中心となり、「自分自身が何か一つ決めたことを限界まで頑張る」「世界の動きをしっかりと見る」という方針を決め、これを学年集会で生徒と、保護者集会で保護者と共有。学年が一九となって目標に向かう雰囲気をつくった。その

渋谷教育学園幕張中学・高校

◎千葉県幕張新都心に位置する。1986年に附属中学校を開校し、中高一貫教育を開始。教育目標は、「自調自考の力を伸ばす」「倫理感を正しく育てる」「国際人としての資質を養う」。多様な留学プログラムや留学生の受け入れなど国際交流が活発。帰国生も積極的に受け入れる。

創立 1983 (昭和58) 年 形態 全日制/普通科/共学 生徒数 1学年約350人

10年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、東京大47人、京大7人、一橋大12人、東京工業大6人、千葉大39人など185人が合格。私立大は、早稲田大173人、慶應義塾大149人、上智大51人、明治大74人など延べ877人が合格。海外大は延べ25人が合格 (07年から10年の合計)。

住所 〒261-0014 千葉県千葉市美浜区若葉 1-3 電話 043-271-1221

Webサイト <http://www.shibumaku.jp/>



井上一紀
Inoue Kazunori
渋谷教育学学園幕張中学・高校
2学年主任



山崎弘一
Yamazaki Koichi
渋谷教育学学園幕張中学・高校
進路部長



豊島幹雄
Toyoshima Mikio
渋谷教育学学園幕張中学・高校
国際部部长

上で教師の考えや生徒の実態を踏まえて教育活動を検討している。まずは教育目標の一つである「自調自考」の力がどのような教育を通して育つのか、実践を追ってみよう。同校では、「スポーツフェスティバル」(体育祭)や文化祭などの学行事は、生徒が企画から運営までを担当するなど、「自調自考」の実践の場となっている。その方針がより強く表れているのが、校外研修や宿泊研修など社会との接点が多い校外活動だ。

校外活動は、原則として中学1年生から現地集合・解散で、研究テーマごとに編成したグループ単位で行動する。早期から生徒の自主性に委

ねられるのは、緻密な事前学習があるからだ。事前学習では一人ひとりの生徒が興味・関心に応じて研究テーマを設定し、グループごとに見学コースや研究内容を詳細に検討して、分刻みのスケジュールを作成する。そして計画書を提出し、教師の承認を求める。

「最初から教師を納得させる計画書を作成できる生徒は、ほとんどいません。それでも、教師は手直しをせず、『本当に時間内に回れるのか』『研究テーマを十分に深められるのか』と生徒が気付いていなかったことに気付かせたり、考える観点を与えたりして、最後まで生徒自身に考えさせます」(山崎先生)

グループでの話し合いも、最初からスムーズに進むとは限らず、なかなかまとまらなかったり、衝突したりすることもあった。しかし、完成を目指して計画書を共同で練り上げる作業を通し、次第に協調性やコミュニケーション能力を体得する。

見学先に電話をかけてアポイントを取る作業も生徒が担当する。時には、「忙しいからかけ直してほしい」と言われたり、訪問を断られたりし

て再考を迫られることもある。そのような体験から、「自分の思い通りにならないこともある」と実感し、相手の立場から物事を考えられるようになっていく。井上先生が話す。

「思い通りにならない体験をすることで、親切にされたときの感謝の気持ちが大きくなり、学校に帰ってから自発的に礼状を書く生徒も出てきます。社会とのかかわりから、人として大切な姿勢を学んでいます」

高校2年生の中国への修学旅行前には、中国の歴史を授業で重点的に学習するなど、校外学習と教科学習



ニュージーランド研修でマオリ文化の説明を聞く

とのつながりも意識し、幅広い教養の習得を目指す。また事後学習では、各自がレポートを作成。他の生徒に向けた発表の場を設け、プレゼンテーション能力の育成につなげる。

更に日々の教科学習によっても、自分で調べ、考える力が育っていく。「どの教師も当たり前のように生徒に考えさせる指導を重視しています。例えば、理科では他校に比べて実験の比重がとても大きいですし、私が担当する国語では、書くことをいとわない生徒を育てたいと考えています。そのように教師の方針が一貫しているのは、生徒に付けたい力がしっかりと共有されているからでしょう」(山崎先生)

高校1年生から約1年半をかけて取り組む「自調自考論文」も、「自調自考」の力の育成には欠かせない学習だ。テーマは基本的に自由で、裁判員制度を研究する生徒もいれば、日米のユーモアの感覚の違いを調べたり、「オタク文化」を追究したりする生徒もいる。分量に明確な決まりはないが、A4用紙10枚程度が一般的で、30枚以上のものもある。最初に授業時間を使って論文の構

成やルールなどを一斉指導した後
は、昼休みや放課後など各自が時間
を見つけて取り組む。ほとんどの生
徒は何度も書き直す必要があり、そ
れほど時間的なゆとりがあるわけ
はない。完成までは個別指導が中心
となるため、学年間で協力し、すべ
ての教師が学年の垣根を超えて常時
10人ほどの生徒を受け持つ。昼休み
や放課後に個々に面接し、進捗状況
を確かめたり相談に乗ったりして
フォローするが、ここでも生徒に考
えさせる指導が基本だ。国際部部長
の豊島幹雄先生が説明する。

「面接を繰り返して、『この記述の根
拠は何か』『他の章とのつながりは
適切か』など、客観性や説得力の観
点から、かなりハイレベルな指導も
します。中には途中で行き詰まる生
徒もいますが、教師は答えを提示せ
ず、生徒が自力で考えるのを根気強
く待ちます」

最初は教師に頼ろうとする生徒も
いるが、やがて「自分が考えなけれ
ば先に進まない」と気付き、粘り強
く考え始める。前向きな気持ちに
なった生徒は、書籍やインターネット
での資料集めにとどまらず、アン

ケート調査をしたり、大学の教授に
取材をしたりすることもある。また
膨大な情報を取捨選択する作業を通
し、クリティカル・シンキングの基
礎も培われていく。

「最終的に完成した論文の多くが、
大学生が作成する論文に匹敵するレ
ベルと感じます。産みの苦しみがあ
りますが、やり遂げたときの充実感
や達成感は大きく、自分への自信と
なります」（井上先生）

教育実践2

多様な個性を持つ生徒が 認め合う場づくり

多様性を受け入れ、外の世界に関
心を持つグローバルな意識の育成に
も力を注ぐ。それが「自調自考」の
力と相まって、国際人としての資質
が養われていくのである。

そもそも校内の環境そのものが、
社会の縮図のように多様性にあふれ
ている。常時、さまざまな国からの
留学生を受け入れているほか、学年
の30人ほどが帰国生で、英語を除く
授業やホームルームは一般生（帰国
生ではない生徒たち）と共に学ぶ。
特別活動入試で入学した、スポーッ

や武道、芸術などに秀でる
生徒も校内で個性を発揮す
る。

「多様な個性を持つ生徒
が認め合い、尊敬し合う場
にしたいというのが、学校
づくりの方針の一つです。
こうした環境で学ぶこと
が、多様な文化を受容する
ベースになると考えていま
す」（山崎先生）

自分とは異なる個性との
出会いから得られる学びは
大きい。例えば、帰国生は
一般生に比べ、自分の意見
を率直に主張する傾向があ
るといふ。お互いが違いを
意識し合う中で刺激し合い、一般生

が自分を積極的に表現するようにな
ったり、帰国生が日本の文化への
理解を深めたりする。また帰国生と
のかかわりの中で、一般生が英語の
学習に一生懸命に取り組むようにな
ることも多い。同校の卒業生で、現
在はユネスコ日本政府代表部に所属
する渡邊晶子さんは、「クラスに十
数人いた帰国生との文化の違いを身
近に感じる事ができた」と、在学

全米高校模擬国連大会に日本
代表として出場



マカオからの高校生との交流会。高
校1年生全員が参加



時代の思い出を校報に寄せている。

長期・短期の留学生の受け入れに
加え、イギリスやシンガポールへの
研修プログラム（いずれも希望者）
や中国・シンガポール等の高校生の
ホームステイ受け入れなど、留学生
と触れ合う機会も多い。今年度の高
校1年生は、ホームルームの年間
テーマの一つを「世界を語ろう」と
し、学年集会で留学生と互いの国の
印象などを意見交換したり、ドイツ

人留学生と共に広島を訪れて平和学習を行ったりした。

「日常生活での接触にとどまらず、深いレベルの交流を通して、外国人と対等に議論する力を育てるため、どの学年にもこうしたプログラムを用意しています」（豊島先生）

毎年、ニューヨークで開催される「全米高校模擬国連大会」への出場を目指す生徒の自主勉強会も、学校としてサポートしている。模擬国連は、世界中から集まった高校生が各国大使の立場になり、実際の国連と同様に議論して決議案を採択する大会で、基本的に英語で進行される。2010年には2人の生徒が日本代表団5校10人の一員として出場し、優秀大使賞を受賞した。

「国際情勢の理解やグローバルな感覚の養成にとどまらず、粘り強く相手を説得する力や状況判断力が育成されるなど人間的にも大きく成長します」（豊島先生）

進路指導

強い意志を持つには

「自分で考える力」が土台となる

同校の進路指導の方針は、まさに

「自調自考」の理念に沿ったものだ。

『「将来何をしたいのか」「何を学びたいのか」を考えさせることが第一です』（山崎先生）

生徒が自分と向き合い、将来の可能性を広げていく機会も豊富に用意している。年1回の進路講演会では、各界で活躍する人物を招き、仕事や人生について語ってもらう。また高校2年生が対象の「大学ガイダンス」では、大学生、社会人、既卒の受験生のそれぞれの立場の卒業生が受験や将来について語る。

年1回、全学年の生徒や保護者を対象に開催される「海外大学説明会」には、国際人としての資質の養成を目標とする同校らしさが表れている。説明会には海外大学在学中の卒業生を招き、リアルな体験を交えて楽しさや苦勞を語ってもらう。

同校からの海外大学進学者は帰国生が中心だが、一般生の挑戦も珍しくない。海外大学向けの進路指導は、生徒に「学びたい」「行きたい」という強い意志があることが前提だ。その上で、授業形態をはじめ国内大それとの違いを説き、「どのような分野を学びたいのか」「その分野を学

ぶには、日本と海外の大学のどちらを選ぶべきか」といった流れで検討を進める。将来的にグローバルな仕事や社会貢献をしたいという意思があるかどうかも重要な点となる。一定の英語力も不可欠だ。

「海外に単身で飛び出していくような強い意志は、自分で考える力が育っていないければ持てません。『自調自考』や国際人としての資質を育てる教育の成果の一端と考えています」（豊島先生）

同校は、進路関係のイベントを中心に、卒業生が来校して在校生に語り掛ける場面が多い。学校生活が充実していたと思えるからこそ、母校に協力したいという気持ちが生まれるのだろう。

「教師が出来ることは限られているかもしれませんが、その分、本校では卒業生が気軽に来校し、生徒のために一肌脱いでくれます。そんな卒業生の輪により、徐々に良い学校になってきました。これからの社会で通用する力が身に付くだけでなく、卒業してからも楽しい思い出と共に母校のことを思い出す、そんな学校でありたいです」（山崎先生）

ベネッセコーポレーション担当者より

**海外進学という
希望進路の実現を
支援する**

高校事業部 首都圏事業推進ユニット
藤井雅徳

社会環境がよりグローバルになり、日本企業の海外展開が加速する中で、高校生の海外大学進学をサポートする「海外進学支援事業」を、今年度、本格的に始動しました。近年、日本人の留学者数は年々減少が続ぎ、いわゆる「内向き志向」が顕著になっています。また、2010年春の卒業生の就職率も60・8%（文部科学省「2010年度学校基本調査」）となり、就職率が5割を割り込む大学も多く存在しています。このような情勢を鑑み、大学選びにおいて「国内進学」だけでなく、「海外進学」という新たな選択肢を用意することで、グローバルな社会で活躍する人材育成を支援したいと思っています。今の高校1年生が社会に出るのは「7年後」、中学1年生であれば「10年後」です。この7年後、10年後といった将来の社会を想像すると、よりグローバル化は加速し、大学選びの基準も大きく変化していくと思われます。私たちは「10年後の社会」を見据え、志と気概を持って、海外進学支援に取り組んでいきたいと思っています。

事例4 社会へのパスポート 「力」

大学や社会で必要な 思考力・表現力を育てる

2011年、ベネッセコーポレーションは大学生向け教材『大学生基礎力BOOKシリーズ』を発刊する。大学での学びに必要な基礎力、そして社会が求める人材要件を踏まえ、この教材でどう育成支援をしようとしているのか。教材の概要と共に紹介する。

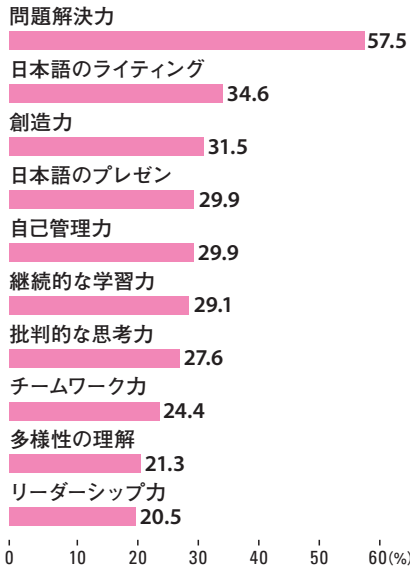
大学と企業の双方が ギャップを抱えている

「社会人基礎力」「学士力」「就業力」など、社会が学生に求める力に関する議論が活発だ。そして、大学は学生の育成に、企業は採用活動に

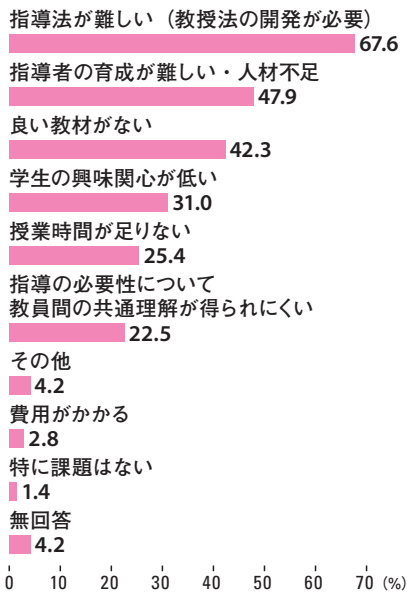
工夫を凝らす努力を続けている。だが、当事者である学生の置かれた状況を冷静に見つめることも重要だろう。社会の変化を受けて、経験の浅い社員でも任される仕事は複雑で高度になった。しかし求められる能力が変わったことに、大学教育も人材要件を提示する企業も十分な対応が

出来ていないのが現状ではないか。企業で求められる力と大学教育とのこうしたギャップを解消するため、ベネッセコーポレーションでは就業力を課題解決力と定義し、大学人が必要と認識しつつも指導法が難しいとする能力を育成する教材の開発を行った。

データ 1 今後特に重視して 育成していきたいスキル・能力



データ 2 問題解決力の 指導を実施する場合の課題



※出典／Benesse 教育研究開発センター「大学生の能力育成に関する調査報告書—学部長を対象に」（2009年1月）

ベネッセコーポレーション担当者より

正解のない学びへの 対応力を高める教材

大学事業部 松本 隆

学生の就業力養成や進路保障は大学にとって責務の一つとなりました。既に多くの大学で職業観育成の取り組みが行われていますが、課題解決力など汎用的能力と呼ばれるスキルの育成も行ってこそ、本当のキャリア教育と言えるのではないのでしょうか。

ベネッセでは大学生向けに課題解決力を育成する自学自習テキストを開発しました。大学や社会での「正解のない学び」に対応するものであり、日本の教育プログラムを見直す契機になればとの強い思いから始めました。今後も、社会が求める人材育成のための教育プログラムを開発していきます。

教材監修者が語る「社会が求める力」

社会で求められる課題解決力の育成を目的とした

『大学生基礎力BOOKシリーズ』。それぞれの教材では具体的にどんなシーンで役立つ力を育てようとしているのかを、教材監修者に聞いた。

クリティカルシンキング

自分の頭で考え

判断する力が必要

情報をうのみにしない態度が社会では必要に

子安増生教授 京都大教育学研究科

情報の変化が激しい社会でさまざまなことを選択し判断していくには、情報の内容の真偽とその情報が誰を利用するのかの両方を見抜く必要があります。特に「信頼できそうな情報源」に対しては油断してしまうことも多いものです。情報をすぐにうのみにせず、「それは本当だろうか」と、いったん留保して評価する態度が社会では必要です。大学時代に身に付けてほしい力です。

論理的に考えることが

自分の頭で考えることにつながる

楠見孝教授 京都大教育学研究科

さまざまな角度・視点で物事を考える。併せて、自分自身の思考に自己中心的な考

ではなく、確かなデータに基づいて問題を科学的に分析し、分析結果を根拠に判断したり、まわりを説得するスキルも、ビジネスなどの場では当然身に付けておくべき基本的なリテラシーです。データに基づいて問題を解決する思考力の必要性はより高まっているといえるでしょう。

ロジカルライティング

海外でも通用する主張する力が必要

あらゆる国の人々に対して

説得力のある主張をする技術を身に付けたい

大庭コテイさち子氏 コロンビア大教育者大学院卒。芸術学修士(M.A)教育学修士(Ed.M)

日米の違いはいろいろありますが、話の構造と主張法も大きな違いです。英語が堪能な日本人留学生やビジネスパーソンでも「言いたいことがうまく伝わらない」と悩むことがあります。それは、これらの違いを学習する機会がなかったためです。論理的に思考し、話をクリアにまとめるコツをつかめば、アメリカだけでなく、日本を含むあらゆる国の人々に対しても、説得力のある主張が出来るようになります。文章作成以外にも、プレゼンテーションや演説に活用可能な技術は、学生や生徒にぜひ身に付けてほしいスキルの一つです。

大学生が実感する「必要な力」

『大学生基礎力BOOKシリーズ』に実際に取り組んだ大学生に、教材から得た気づき、更に大学や社会で必要な力について語ってもらった

「クリティカルシンキング」に取り組んで、たくさんの方の話を聞き、精査する力が高まる

大橋瑛子さん

横浜市立大国際総合科学部4年

私はさまざまな情報を吟味し、理解する「クリティカルシンキング」の教材に取り組みました。例えば、文章を読んで、その主張と根拠を探し出し、更に根拠に思い込みや偏見が含まれていないかを考察していく、といったものです。「研究者が書いた論文だから」、「マスコミが発表した記事だから」とうのみにするのはなく、批判的な視点を持って情報に向き合うことが大切なのだと思ひました。

また、自分の意見を俯瞰して組み立てることを意識するようになりました。これは、自信を持って自分を発信することにつながります。私は、これまでのアルバイトやインターンシップなどの経験を通して、社会ではいろいろな人の意見を聞くことが大切だと感じています。しかし、無批判に意見を受け入れるのではなく、混乱するだけです。多様な意見を聞き、それを精査する力が必要で、そういう力がこの教材で高まるのではないかと感じました。

もし、大学に入学した直後に出会っていたら役に立ったと思います。授業の受け方やゼミでの討論の仕方を1年生のうちから理解すれば、自分なりに問題意識や

大学人が語る「教材を通して身に付けさせたい力」

法政大デザイン工学部では、1年生の導入教育のツールとして『大学生基礎力BOOKシリーズ』の「ロジカルライティング」を活用予定だ。教材に取り組むことで学生たちにとどのような力を身に付けてもらいたいのか、同学部教授会主任の田中豊教授に聞いた。

◎法政大デザイン工学部

大学でも社会でも必要な考える土台を築いてほしい

大学での学びの基礎となる論理的思考力を導入教育で養う

法政大デザイン工学部では、1年生に対して少人数で大学での学びとはどんなものかを指導する「導入ゼミナール」を実施している。ここでは各学科の専任の教員が指導に当たるが、高校を卒業したばかりの学生と接するなかで「最近の学生は、論理的な文章を書くのが苦手なようだ」と多くの教員が実感するようになった。

「レポート作成やプレゼンテーション、協同的な研究を重視する本学部では、自分の考えを論理的に伝える力は非常に重要です。これまでの大学教育ではそのような力を4年間の学びのなかで身に付けさせるというスタンスでした。また、教員の側に学生の論理的思考力を鍛えるノウハウがなかったのも事実です。発表の仕方や論文の書き方、図書館の使い方など、大学での学

学びの成果を振り返る教材としても活用できる

び方を広く学んでいく『導入ゼミナール』で、論理的な思考力とは何か、なぜ必要なのか、どうすれば身に付くのかを、専任教員との密接な交流のなかで学生に理解させたいという思いから、2011年度より『ロジカルライティング』をテキストとして採用することとしたのです（田中教授）

大学4年間の学びを価値あるものとするため、導入教育は特に重視しているという同学部の教育方針にマッチした教材であったわけだ。

「ロジカルライティング」で身に付けさせる論理的な思考力は、大学においてはもちろん、社会に出ても一層必要とされると田中教授は断言する。

「企業で説得力やインパクトのある企画書を作成しプレゼンテーションを行うため

には、論理的な思考力が不可欠です。特に、工学をベースにほかの学問分野と融合しながら新しい価値を創造していくために、論理的思考力は大学時代にしっかりと伸ばしておくべき力だと認識しています」（田中教授）

「ロジカルライティング」は大学4年間の教育効果を上げるだけではなく、専門教育に入る前や就職活動の節目に自分の伸びた部分、足りない部分を振り返るツールとしても利用できるだろうと、田中教授は同学部における教材活用の可能性を語る。

「入口部分の教育の充実はもちろん、出口に至るまでに、学生本人が自分の成長を確認する場を設けることも、大学に求められていますし、その機能もこの教材は持っている」と期待しています（田中教授）

ものづくりのなかでも、「デザイン」は日本が世界をリードしている分野であると田中教授は語る。国際的な競争が激しくなるなかで、日本のものづくりをリードする人材を育てるために、論理的な思考力を身に付けさせたい……同学部は広い視野で教育の充実に取り組んでいるのだ。



法政大
デザイン工学部教授
田中豊
Tanaka Yutaka

疑問を持って学問に取り組むことが出来ます。4年間の学びもきっと大きく変わったものになると思います。

「データベーストシンキング」に取り組んでデータに基づいたアウトプットは他者と協同するためのベースとなる

武田昂来さん
慶應義塾大経済学部2年

私は事実を基に思考する「データベーストシンキング」の教材に取り組みました。この教材の趣旨は、直感的な意見にデータを加えることで初めて相手の理解を得られるということだと思います。

大学でも「データに基づかない分析は意味がない」と学んでいます。グループで発表するときもそれは強く意識しています。裏付けとなるデータを集め、それを見る人に的確に伝わる形で表現することが出来ない、発表でも厳しく指摘されることになりました。

大学で学んでいて感じるのは、どうすれば説得力を持って相手に伝えられるかというアウトプットの難しさです。考えてみれば、高校までの学習でインプットには慣れていますが、アウトプットを学ぶのは大学からです。私の周りでもインプットは得意な人が多いのですが、アウトプットが得意な人は少ないです。

データに基づいて考えることは、大学での研究はもちろん、将来仕事に取り組む際にも、学生が修得しておくべき土台だと思えます。その土台がないと、価値観の違う人たちが集まって協同し、一つのテーマを突き詰めることは出来ません。社会に出たときに、チームの一員として自分の考えをアウトプットする力が、この教材で養えると思います。

*当教材は大学生向けに制作しています。高校生への販売は現在、計画していませんのでご了承ください。

すべての学びや社会生活は「ことば」から始まります。そして、その力が学校での学力向上、社会に出てからのビジネス現場での活躍、あるいは友人や家族との繋がりにさまざまな影響を与えているのは間違いありません。昨今、活字離れ等を主な理由にした日本語の乱れが問題となっています。学校現場では「語彙」の不足や「読解力」の低下によって、生徒への指導に支障をきたしているとの声を耳にします。

また、学校を卒業して社会人となったものの、求められる専門知識以前の一般的な語彙量の少なさから、与えられたチャンスを十分に活かすことができなかつたりと、「語彙力」や「読解力」の不足が社会で活躍する人材の不足へと繋がっているとも言われています。

「語彙力」や「読解力」は、思考力や判断力、そして表現力にも直結します。当然、それはありとあらゆる場面に関係し、真に豊かな社会を築いていく上での喫緊の課題ではないでしょうか。

朝日新聞社とベネッセコーポレーションは、「語彙」とは社会そのものであり、「読解力」はそれを読み解く力であると考えます。そして「ことばの力」を養う大切さを広く訴え、より多くの人たちが社会の中で自身をさらに活かし社会をより豊かなものとするために、「語彙・読解力検定」をはじめます。本検定を通じて「語彙力」や「読解力」の重要性に気づき、生きていくための基礎となる「ことばの力」を身につけるきっかけを提供することを目指しています。

2011年6月よりはじまります。

語彙・読解力検定

◎パンフレットのご請求・検定についてのお問い合わせ

お客様サービスセンター 0120-350455 受付時間/月～金8:00～19:00 土8:00～17:00
(祝日・年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション 岡山本社 〒700-8686 岡山県岡山市北区南方3-7-17

詳しくはホームページをご覧ください

<http://www.goi-dokkai.jp/>

「ことばの力」は、 人生にモノを言う。

編集後記

- ◎多様な個が交わる「チーム」で夢や目標を語り、時には議論し、協同して困難を乗り越え実現する。そんな体験を多くさせよう！というコンセンサスを社会全体に作れば、と感じています。(松田)
- ◎若者の内向き志向を嘆く前に、若者が多少失敗しても回り道をして思い切って挑戦でき、それを見守れる教育や社会であることがグローバル化の中では本当に必要だと感じました。(二瓶)
- ◎社会体験をした大学生が「お世話になった企業や支援者の皆さんのためにも、社会に出て頑張ります」と言った一言が心に残っています。多くの人との本気の触れ合いを通して人間は成長するのですね。(国枝)
- ◎大学生の就職難に関するニュースが連日取り上げられています。これから大学生になる高校生には「不安」よりも「希望」を強く持って欲しいです。(榊原)
- ◎「学生が問題に直面した時、指導することを我慢した」と語る教授の姿勢が学生に主体性と広い視野を持たせるために重要なのだと気付いた取材でした。(大室)
- ◎「カタリ場」を取材し、社会がどんなに変わっても人は人によって心を動かされ、前進していくことは不変だと感じました。そして、人を教え、導き続ける先生方の生徒の成長を願う気持ちの強さを教えていただきました。(梅井)
- ◎異なる個性との出会いと深いレベルの交流が出来るようなさまざまなプログラムを準備し、生徒が自ら気づき、行動することを見守る先生に感動しました。(今西)
- ◎「子どもが学びに向かわないのは大人側の責任」と本気で受け止め、高校・大学・企業の垣根を超えてこの課題に向き合わなければ解決不可能であることを、当事者の一人として強く意識する機会となりました。(小泉)

VIEW21 高校版・臨時増刊号に関する
ご意見、ご感想を
編集部にお寄せください。

E-mail

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

VIEW21 高校版 臨時増刊号 Vol.2

2011年2月25日発行

発行人 山河健二
 編集人 松田 実
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション
 教育事業本部 中学・高校・大学教育事業ドメイン
 印刷製本 (株)ビーヴィオコーポレーション
 編集協力 (有)ペンダコ
 執筆協力 二宮良太
 撮影協力 ヤマガチイッキ、坂井公秋、南 弘幸

VIEW21 臨時増刊号編集部 ※2011年2月21日に移転しました
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング14階
電話 03-5320-1294

©Benesse Corporation 2011